

待遇を與へられる相當悪くない位地だつた。殊に彼にとつては、最も恵まれた仕事だつた。といふのは當時の秀英舎は、殆んど東京中の出版物を一手に引受けてゐたので、彼は校正しながら多くの新刊書を讀むことが出来たのだ。彼は此の便利と幸運を利用しないではおかなかつた。ところが他の部員達は此の破格の抜擢を嫉視し、いろいろ皮肉な眞似をして彼を追出しにかゝつた。然し、佐藤はかういふ敵にたぢろがなかつた。時間の上で朝夕二三時間も餘計に働いてみせると同時に、仕事の上でも斷然他の連中の倍以上も働いてみせた。彼は秀英舎の名校正と謳はれた。

一 出版界の「新聲」

△此の校正部の仕事をしてゐる間に、彼は種々文壇の裏面の消息に通ずると共に、活版術をも習得してしまつた。

彼は文壇が徒らに赤門出と硯友社の二派に専有されて、此の二大文壇の閑外者は可なり立

派な天分を持つてゐる者でも、却々世に出ることの出来ぬ不條理な現狀に義憤を感じた。かゝる情實の下に、出世を恵まれぬ多くの無名作家のために深い同情を寄せた。と云ふよりも、それは彼自身の身の上でもあつたから――

△「よし！ 一文士となつて終るより、俺は出版事業を起して不運な無名作家達を救済し、併せて良書を刊行して世を裨益しよう！」と佐藤義亮が出版事業に身を投ずる決心をしたのはそれから間もなくだつた。當時彼は未だ二十歳そここの若者だつたから、此の感憤が極めて純粹なものであつたことは云ふまでもない。

△彼は先づ雑誌から始めて行くつもりだつたが、日給二、三十錢の校正係ではそれだつて却却簡單に手が出せない。多少借金もしなければなるまいと思つたが、此の田舎出の寒書生を後援してくれる者などは廣い東京にもなかつた。そこで彼は資金を得るために儉約に儉約をし、更にその上夜勤をひつ切りなしに續けて、遂々三十幾圓かの金を拵へ、これを資本にして秀英舎に勤務の傍ら雑誌「新聲」を發行した。

此の三十餘圓の金こそ、彼が今日の新潮社を築き上げた大きな礎石となつたのである。

△「新聲」を出すや、彼は字義通に不眠不休の活動をした。而して無名作家を紙上に糾合して既成文壇に對する潑刺たる新興の意氣を示してみせた。

「新聲」からは高須梅溪、金子薫園の二人が先づ世に紹介された。かくて雑誌が着々發行部數を殖やして行くのを見て、彼は秀英舎を罷めて専心出版に従事することになつた。

△兎も角以上が彼の出版界への紀念すべきスタートで、其後年々に堅實な發展をして、明治三十年代に入るや早くも東京に新聲社ありと云はれるまでになつた。

ところで明治三十八年、彼は一生涯の難關にぶつかつて、一度新聲社を解散するの已むなきに至つたが、その年再び出版界に乗り出して、茲に新潮社の看板を掲げるに至つたのである。

此の時彼の懐にあつた金は僅かに百圓足らずであつたさうで、彼は此の小額の資金を巧みに運轉して活動を續けて行つた。

△努力の種は何時かは芽ぐみ、勤勉の實また必ず花咲くものか、新聲を新潮と塗り更へた後

の彼の事業は、雑誌から單行本の出版へと、實に目醒ましく發展の一路を辿つて遂に今日の大をなすことになつた。

彼は求願通り多くの無名作家を世に出すと共に、所謂新潮社ものの聲價を以て、文藝出版物上に抱負の一端を實現することが出来た。素志こそ貫かね、佐藤義亮は正に成功の大殿堂を築き上げた一人である。

製菓王森永太郎

一 アメリカ放浪記

森永の事業も一時ほどの勢はないやうだが、何にしても彼は日本の製菓王としてちよつと類の無い成功者だ。

慶應元年佐賀縣の伊萬里に生れ、幼少時代に兩親に死別生別した不運な生立を持つてゐるが

それだけ浮き世の風が早く身にしみ込んで、立志發憤の動機になつたといへば、天涯の孤舟必ずしも不幸とのみは言へない。

森永は名産伊萬里焼の本場に生れた。そこで彼は將來此の陶器の發展を確信して、明治十八年横濱に出て或る陶磁器貿易商の店員となり、日夕外人の日本陶器に對する嗜好を見た。當時横濱は未だ貿易熱が旺盛で、猫も杓子も外人相手に一儲けせんとする氣風が横溢してゐたが、彼は寧ろ單獨海外に渡航して一擧にして奇利を博するに若かずと考へた。

そのうち彼は片言まづりて外人と商賣の會話を交せるくらゐにはなつた。彼はもう矢も楯も堪らなかつた。洋行々々といふ時世の流行が一層彼を刺戟した――

『よし！ アメリカに行かう。娘ツ子でも學問で西洋へ押し出す時世だ。商賣ものを持つて押し渡れぬ道理はない』と、かう彼は決意して若干の陶器類と雜貨を携へ、船夫同様の思ひをして桑港行を敢行した。時に明治二十二年、森永は二十四か五の血氣旺りの若者だつた。

一 天涯萬里異境の月

着けば燦爛たる文化の港である。横濱にメリケン長屋が建てられると、大騒ぎをしてゐた日本とは一寸勝手が違ふ。大厦高樓が櫛の齒の如く並んでゐる下を、異人共がさも身輕げに濶歩してゐる。電車が馳り、電線が蜘蛛の巢の如く空を蔽ふてゐる。森永は闘はずして先づ敵の陣營に氣を吞まれた。

で、目的の商賣は案に相違して大失敗を遂げた。どういふ失敗の経路を辿つたかは、茲に多く記す必要もあるまい。兎に角彼は上陸後數ヶ月のうちに全く無一物になつた。これが日本の内ならどうともまた身の振り方がつくが、當時とすれば所謂天涯萬里の異境で頼むに知己なく歸るに旅費なき有様となつたのだから始末が悪い。

流石の森永も一時全く途方に暮れた。然し、一度進んだ國の有様を見ては、どうしてもヲメヲメ日本へ逃げ歸る氣はしない。彼は石に嚙り付いても、アメリカで何か拾つて歸らねばなら

ぬと決心した。

或る日、桑港の繁華な通りをアテドもなくブラ／＼歩いてゐると、すぐ前に行くのが確かに同胞のやうだ。當時桑港に日本人の数は極く稀で、居ても森永のやうな浮浪人には寄りつけない連中だ。然し、今眼の前に歩いてゐる日本人はそれと違ふ。下級の労働者でないまでも、確かに自分のやうな出稼人の一人に違ひない。

彼は嬉しくなつて、

「モシー」といきなり背後から聲をかけた。相手は面喰つた容子で振り向いたが、正しくそれは黄色い顔に鋭い眼を持った日本人だ！

「オ、！」と、向ふでも意外と歡喜のごつちやませになつた表情を見せて、

「同胞ぢやねえか！」と齒切れのいゝ日本語で近寄つて來た。

相手はすぐに森永を手近のレストラントに引張つて行つて、先づ彼の身の上を聞いて呉れた。

「フム。さういふ無鐵砲なのが、まだ此の桑港にも二三人ころがつてゐる筈だ。實は俺も横濱

の人間で、一人前のコツクになりたいと、二年ばかり前密航同様で此處に上陸した。今は或る毛唐人の臺所で働いてゐるが、そのうちこれでも一旗擧げるつもりさ。お前の力くらゐにはなれようぜ」

一 菓子職人となる

森永は此の男の世話で、桑港の或る製菓工場に住み込んだ。彼が特に西洋菓子の技術を覚え込まうとしたのは、桑港へ來てから安物のビスケットをつまんでみる毎にその舌あたりが上等で、迎も日本の駄菓子と比較にならないことや、種類の又多いのに感心した結果だ。中には一粒食べただけでも、長生きするやうな美味を持つてゐるものがあると思つた。それが後から想ふと、ドロツプやボンポンの類だつたから面白い。殊にボンボンなどは早く日本にも來てゐた筈だが――

彼はジャツブ／＼で工場の人間達に稀らしがられた。手眞似澤山だつた會話が、どうやら不

自由なく使へるやうにもなつた。彼は夜も籠の火気の消えないうちは、職工にねだつた仕事を教へて貰ふ。だん／＼仕事に分つて来るに従つて、彼は行先日本へ歸つた曉は、是非共此の西洋菓子の製造で名を揚げてやらうといふ決心が強くなつた。

森永はさうしてゐる間にも、時々國許の親戚へアメリカの菓子を幾種類か送つてやつた。

「これも矢張り私が今働いてゐる工場の製造品です。どうか是非共味つてみて貴方方の口にも向くか向かぬか遠慮のない批評をして下さい」と必ずこんなことを書き添へてやつた。矢張りビスケット、チョコレート、ドロツプといつたやうな兎も角日本人向きのものを送つたのだらうが、月並な禮狀以外にそれが實際に非常な好評で彼等に迎へられるのがよく分つた。

彼は在米中、かういふ一種のテストを絶えず本國に向つて試みることを忘れなかつた。

日本人に向く珍らしい菓子——これが彼の歸國後に描いてゐる計畫だつた。

然し、アメリカの菓子修業から却々彼は日本へ歸れなかつた。彼は一通り西洋菓子の技術を覚え込んでしまふと、今度は歸國後の資金を稼ぎ貯めるため桑港三界で随分苦勞した。そのた

め彼はいろ／＼な仕事にも手を出したらしいが、洋菓子職人の腕をつくつた以外には多く得るところなくて、やがて足掛十年の月日が米國で経つてしまつた。此の上時世を逸してはと、彼がぶらりと日本へ歸つて來たのは明治三十二年の六月である。

一 七度死すとももの決心

森永は日本へ歸つて來てから、最初赤坂の溜池附近に僅か三圓の家賃の家を借りて、洋菓子の製造に手をつけてみた。懐に持つてゐた金も知れたものだつたし、世間がまた彼の作る菓子を旨く歓迎してくれるかどうか、皆目見當が立たなかつたので、小僧一人を雇つてポツ／＼始めてみたのだ。彼は自分で車を引張つて菓子屋を卸しに歩いてみたが、「上等過ぎて駄目だ」といふのを異口同音に、何處の小賣店でも残念さうに斷はられた。上等過ぎてといふのは、うまいが高いといふ意味である。それがビスケット類からしてさうだつたから、最初のうちは、折角アメリカくんたりへ行つて覚えて來た洋生（シュークリームやスポンジ・ケーキなど生菓

子の類なぞには、迎も手が出せなかつたといふ。

それでも自分の製造する菓子に大いに自信だけは持つことが出来たから、熱心に賣れ口を開拓してゐる中、翌明治三十三年例の北清事件が起つて日本の經濟界に大動搖を來し、彼の僅かばかり取引してゐた銀行が潰れて、虎の子同様の營業資金を全部失つた。

森永はこれが實に打撃だつた。事を誇張して云へば、資力と信用の薄弱な日本の實業界といふものが嫌になつて、もう一度アメリカへ嫁ぎ直しに出かけようかと考へたくらぬださうである。然し、それでは折角向ふで仕上げて來た初一念が失はれてしまふ。彼は思ひ直して再び西洋菓子の製造に着手したが、さうかうしてゐるうちに世間の景氣も直つて來、一般の嗜好もだん／＼西洋菓子に向いて來て、森永のつくる菓子は大分賣行がよくなつた。元來がアメリカで叩き上げて來ただけに、姑息な遣り方の嫌ひだつた彼は、早速最初の場所を引拂つて明治三十五年、赤坂田町五丁目目店舖を移し、可なりな工場を設備して、急速發展の一路を辿らうとしたが、明治四十年の夏、工場から火を出してそれこそ何もかも焼いてしまつた。

だが、今度は自己の不注意が招いた災厄である。彼は此の重ね／＼の不幸に、少しも屈する色がなかつた。恰度、米國のチュウインガム玉ウイリアム・リグレーが、度々の火災に遭遇しながら、その度毎に勇氣を倍加して發展の一路を邁進したやうに――

一時運に乗つて

彼は今度は芝の田町一丁目目工場を移して、相變らず職工と一緒になつて製造に従事し、こつちからも大いに時代の嗜好を促がすやうな遣り方で、どし／＼アメリカ仕込みの洋菓子類を世間に送り出してみた。明治四十年以降は日露戦争後の好景氣に伴ひ、舶來品熱が再來して、化粧品でも菓子でも、多くローマ字で書かれたり、西洋名前のものが一般に喜ばれる傾向があつた。

彼は此の潮時を逸してはと、或知人から新資金の融通を受けて始めてチヨコレートとキャラメルを世間に賣り出した――

これが見事時世の要求に適中した。殊にキヤラメルは忽ち全国的に賣れ擴がつて、森永菓の聲名は一時に揚がつた。特に廣告せずともキヤラメルのお蔭で、他の菓子まで羽根が生えたやうに賣れた。チョコレートなどは一時原料の十倍近くも儲かつたさうである。これなどはあの舶來品まがいのハイカラな意匠が時好に投じたのである。

森永は製品が成功すると同時に、特に地方の菓子屋をみんな自分の出張所のやうに大切に扱つて、いろ／＼な面倒まで見た。時々、地方のお菓子屋さんを東京に招待して、機嫌を取ることを忘れなかつた。そのため純朴な地方民が感激して、大いに森永の菓子を宣傳してくれたのが、彼の事業の發展に多大の力となつてゐる。

兎に角彼の成功は、不屈の精神と發展力の旺盛さにあつた。

「儲けることに汲々とするよりは、寧ろ一事業成し遂げようと徐ろに努力する方が、眞個の金儲けにぶつかるものだ」と森永太郎は常にこんなことを人に云つてゐる。

ミシン界の羈者シンガー

一 裁縫機考案の動機

「私が裁縫機械といふものに最初の注意を振向けたのは一八四〇年の終り頃で、當時私はボストンにゐたが、ブラツヂエツトといふ人の考案した裁縫機械を見た時に、その機械の製造をやつてゐたオルソン・ヘルプスが、此の裁縫機はまだ不完全で、これでは到底世界的の需用を喚起するに起らぬ。もう一步進歩した完全なものでも出来たら、必ず世界の需用を喚起することが出来て、巨萬の富は忽ちにして發明者の懐に飛び込んで来るだらう——とかう語つた言葉に非常に刺戟されたからだつた。さうして此の機械の改良發明によつて文明生活に齎す多大の貢獻と、その頃悲惨な奴隸的境涯にゐたお針女の解放を思ひ立つたのが、一身を發明の苦界に投じた抑もの動機であつた」とシンガーは自らその晩年においてかう人に語つてゐるが、

恐らくこれが彼の飾らざる眞の告白であらう。

一體、裁縫機械の發明考案は十八世紀の末頃からで、かなり古いものである。併し多少でも機械らしいものの工夫し出されたのは、歐洲では一七九〇年英國のトマス・セントの考案で次はそれから四十年後の一八三〇年佛國もチモニエーによつて稍進歩したものが考案され、一八四〇年には英國でアーチボルド、ニュートンの兩人によつて更に多少進んだ機械が案出されたが、いづれものにならなかつた。米國では一八四三年、ニューヨークのハント兄弟によつて考案され、その翌々年ホーエといふ男がハント兄弟の考案に部分的の改良を加へ、其の點について特許を受けた。ミシンで特許權を獲たのはこれが最初だつたが、これとても單に珍らしい機械として多少世間の注目を惹いただけで、迎も實用には役立たなかつた。越えて一八五〇年にウイルソンといふ裁縫師が更に進歩した機械を考案して市場に賣り出したが、これも遂々ものにならなかつた。以上の數人はミシン發明史上にくばくでも名を止めてゐる連中だが、その他此の發明考案に心血を注ぎ、遂に不成功に終つたり、途中で放棄斷念した人間は何百人あつたか知れない。

一 食を減じて發明に

ミシンなどといふものはしかく簡單な考案のやうに素人には考へられるが、事實はより以上に困難な發明で、最初の考案から半世紀以上の歳月と幾多の發明家の心血を以てしても依然失敗に終りがちだつたから、これを完成して實用に役立たしむるといふことは、到底一朝の事には間に合はぬものと、世間からも至極冷評的に考へられてゐた。それだけ一層發明家の功名心を駈り立てた仕事に違ひないが、兎に角かういふ絶望時代に『よし！ 俺が一つこいつを完全な實用品にしてやらう』と大いに意氣込んで研究に着手したシンガーが、『彼奴も病人の一人だ』と周囲の者から嘲笑を買つたのは無理からぬ事だつた。彼は機械に關して豊富な智識を持つた専門技術者でもなく、たださういふ事に趣味を有し、熱中し易い無名の青年に過ぎなかつたのだから。

シンガーは然しブラツヂエツトの裁縫機を参考として、彼自身の考案を進め出した。さうして苦心慘憺の結果、漸く一の考案が出来上つた。彼はその設計圖を、例のオルソン・ヘルプスと其の共同者ジーベルの二人に見せに行つた。

「これは頭破抜けたものだ！ 従來の如何なる考案よりも優れてゐる」とヘルプスが最初に云つた。

「この考案が設計通り甘く運轉して仕事をすれば、それこそ大成功で、完全な實用マシン時代を實現することになる」とジーベルも口を極めて嘆稱して、彼等二人の製造家は若い發明者を大いに力づけて呉れた。

彼はその時、既に一切の職を抛つてゐた。多少持つてゐた貯金も最後の一仙まで使ひ果して全く収入の道から見放されてゐた。そこでヘルプスが彼に同情して、自分の工場の一部を研究室に貸してくれることになり、尙、四十弗の金まで貸してくれた。

然し、四十弗の金がさう長く彼の生活を保證しやう道理がない。發明が永引くにつれて、彼

は實際三度々々のパンも喰へなくなつて來た。彼はバタの代りに砂糖水を飲んで黒パンを嚙り夜は工場の薄暗い屋根裏で、鼠の仲間入りをして三四年も暮したと云はれてゐる。

一 誘惑の魔手

ところで、かうした血を吐く思ひで漸く出来上つた機械を實際に試験してみると、何事ぞ！ それは一針も縫へなかつた。幾度やり直してみても、無情な機械は冷然として一針も縫つてみせなかつた。

シンガーは喪心するほどがっかりした。

「俺は眞個に一種のモーマニアに罹つてゐたのかも知れない」と悲痛な自己懷疑に陥つたほど――

それでも彼は勇氣を取り直した。これまで漕ぎつけて落膽して投げ出すやうでは、とても此の發明の完成の榮光を見ることは出来ない。それは發明の成否より、一個の人間としての恥辱

であると、思ひ直して彼は殆んど死物狂ひになつた。

恰度、満四年目だつた。彼の機械は、彼自身の言葉に従へば「リズムミカルな音を立てよ」布を縫ひ進んだ。此の時のシンガラの歡喜は、最大級の形容詞を以てしても盡しがたかつたと云つてよからう。

併し、發明の苦心の次に來るものは、これを正當に世に出す苦心である。彼も當然此の難題に苦しめられた。彼の裁縫機の考案の参考にされた上記のブラツジエツトは、裕福な洋服屋で利を見るに敏な男だつた。シンガラの機械が己れの機械に優ること數等で、これを我手に收むれば成功は易々たるものと思つたのだらう。一弗の資本もないシンガラを巧みに説き伏せて、その權利を買收しようとかゝつて來た――

「シンガラ君、折角お互ひに苦心はして來たが、ミシンなどといふものは結局世間に廣く用ゐられるものぢやないよ。殊に資本のない人間が發明品の製作販賣に従事しても、却々巧く行くものでない。さういふ危険を冒して末、利己的な出資者の前に兜を脱ぐ愚を敢てするより、今

のうちに權利を賣却した方がいくら有利だか知れない……それに本來が私の機械を参考にし
て出來上つた君の發明だ。どうだね、シンガラ君。寧ろ私が權利を譲り受けて、君のため發賣に
骨を折らうぢやないか」とこんな風に彼は云つた。

然かも此の間には負債其他、のつびきならぬ事情が種々あつて、シンガラも對ブラツヂエツ
トでは非常に苦しんだ。

然し、結局彼は相手に云つた。

「御好意は有難く感謝するが、私は自分の生み出した發明を矢張り何處までも自分の手で世の
中へ出したい。何人にも權利の譲り渡しは絶対にせぬつもりだ」

而して彼は友人からやつこのことで借り出した數百弗を資金にして、前に記したジーベルを
助手に愈々機械の製造に着手した。

一 特許權侵害の大訴訟

シンガー裁縫機は果して世の好評を買った。すると今度は、甚だ厄介な問題が彼の發明の上
に降り落ちて來た。といふのは、自家裁縫機の部分的特許を得てゐた例のホーエが「シンガー
發明の機械は自己の特許權侵害である。自分の折角考案した部分が勝手に用ひられてある」と
捻込み、二萬五千弗の損害賠償を要求し、若し賠償金を支拂はなければ訴訟を提起して機械の
製作を中止せしめると、容易ならぬ難題を吹かけて來た。

これにはシンガーもかなり悩まされた。折角のスタートで意外な障碍にブツカツた上、特許
といふことに全然素人なので即座に應酬が出來なかつた。そこでいろ／＼對策に苦心中、ボス
トン知名の辯護士で事業家のクラークといふ有力家が味方に立つてくれることになつた。此の
クラークが特許侵害について調査したところ、ホーエの裁縫機には何等創意的の部分なく、ハ
ント兄弟の發明を少し捻くつたもので、殆んど特許の價値のないことが分つた。

で、クラークはシンガーの代理人としてホーエと法廷で争つたが、裁判の結果は「何等特許
侵害を構成せず」といふキツパリした判決になつて、シンガーは完全に勝利を得た。而も彼は

此の重大な係争問題に勝つたばかりでなく、此の事件の縁故から、事業上にもクラークが有力
な味方になつてくれることになつた。

シンガーの事業的成功は、此の時から始まつたと言つていゝ。即ちクラークは自分の友人知
人間を説いてシンガーのために資金を出させ、新たにシンガー・ミシン會社を創立して組織的
製造に取りかゝることになつた。

果然、ホーエとの間に激烈な競争が起つた。潤澤な資本を擁する此の強敵のために、シンガ
ーは一時頗る苦戦をしなければならなかつたが、眞價は遂に最後の勝利者だつた。ホーエの機
械に比べれば値段などずつと高價であつたに拘らず、優秀なシンガー裁縫機はホーエの安機械
を年々に壓倒してしまつた。

一 破天荒の競争法

爾來シンガー・ミシンの聲價は一般に益々高まり、需用は年々に殖えて、事業は眞に隆々と

發展した。現在では先づ名實共に世界を風靡し、どんな競争者が立ち向つても、ちよつと齒の立たぬところまで賣り込んでしまつた。會て獨逸のミシン會社がシンガーの向ふを張つて世界的競争を試み、一時は兩々鎗を削つて戦つたが、獨逸側が特に死物狂ひで奮戦したに拘らずたうとうシンガー・ミシンのために征服されてしまつた。機械の堅牢、價格の低廉並びに實用的な點においても、獨逸製は寧ろシンガーに優つてゐながら、遂に敗戦の憂き目を見て相手の鼻を益々高からしめたのは、一にシンガー・ミシン會社の巨大な資本力と、巧妙な競争戰術にしてやられた結果だつた。日本でも一ト頃兩者の競争が可なり猛烈に行はれたが、シンガー會社の遣り口は思ひ切つて頭破抜けてゐた。その一端を挙げると、本社は支店、出張店、代理店等に命じて、獨逸製たと何製たとを問はず、すべて競争性を帯びた機械は、一般需用者が買つた時の値段のまゝでドン／＼買ひ取らせ、その上に自社の機械を便宜な月賦拂ひで賣り込ませた。而して買ひ取つた他社製のものも悉く米國の本社に送らせ、これを地金に叩き潰してしまつたさうだ。これがひとり日本に於けるのみでなく世界的の仕事だから、その費用だ

けでも全く莫大なもの、一臺平均百圓としても一萬臺で百萬圓、十萬臺で一千万圓に上る譯で而もそれが半歳や一年でなく、何年となく敵を征服するまで續けられたといふのだから、その競争費は恐らく一億二億の數字に達しただらうと想像される。こんな思ひ切つた大袈裟が藝當は到底他社の企て及ぶところでないから、忽ちにして四方の競争者を沈黙せしめてしまつた。事業の發展も此のくらゐ徹底すると、實際向ふところ敵なしである。

シンガーはかう成功に就いて述べてゐる――

道義的目的のない事業は決して成功しない。少くともそれは最後の勝利を得ないものだ。正しくして優れたるものには、必ず社會が味方をする。要はその人の自己の事業に對する確固たる信念あるのみである。而して、一度び目指した事業には先づ以て自己の魂を打ち込め、手腕や頭腦の信頼の前に心魂を打ち込め。一心不亂は、成功への障碍の鐵扉を打ち壊す唯一の武器である。

財界の功勞者藤山雷太

(増徳老人第十一話)

一 祭禮の夜の落雷

「藤山は文久三年八月生れだから今年は確か六十八歳、大日本製糖の社長を金看板に多数銀行會社の重役を兼ね、財界の功勞者として貴族院議員にも勅選されて、六十代の實業家として先づ立派な出世振りでせうが、元々馬越(恭平)、武藤(山治)、藤原(銀次郎)などと一緒ですつと三井の畑で育ち、殊に藤山は亡くなつた中上川彦次郎さんに引立てられて男となつた人間だ。中上川が例の三井の改革をやつた時、藤山はその下で抵當係長だか課長だかをやつて腕を認められたのだが、當時武藤や和田(豊治)は更に一枚下にゐたから、三井では藤山の方が武藤よりちよいと先輩になる。

で、それだけ閱歴に變化の乏しい恨みもありますが、無論三井でだつてお蠶ぐるみにおぢやで育つた人間ぢやアない。尤も雷太なんて名前からして一筋繩ぢや行きさうもありませんがね……」と増田翁、破顔一笑して、

「ところで此の雷太の名に謂はれ因縁があるんです。藤山の出生は佐賀縣西松浦郡有田郷で、家は藩主の鍋島より系圖の舊い郷土だつたが、幕末時分からだん／＼衰微して、御維新後にはすつかり左り前になつてゐた。恰度藤山の生れた日は有田郷十ヶ村の祭禮で、八幡神社の境内に老若男女が集り、浮龍といふ古式なお神樂が始つてゐたが、一天俄かにかき曇り、すさまじい雷鳴と同時に車軸を流すやうな豪雨が落ちて來た――

一方藤山家ではその日の夕方から急に妻女が産氣づいて大騒ぎの眞最中だつたが、くだんの雷が庭の梅壇に落雷してこれを眞二つとした途端、勇ましい産ぶ聲と共に玉、かどうかは保證の限りでありませんがね、兎に角丈夫さうな男の子が生れたのさ。當主の覺右衛門は仰天したり、悦んだり、

「慶い、慶い。祭禮の夜に庭の梅壇に落雷し、男の子をさづかるとは奇しき縁起。女房 喜べ」
 てなことを云つて妻女に力をつけたが、此の人は多少漢學の力があつたところから、
 「雷太し、雷太し——さうだ！ この兒は雷太と名づけよう」と即座に命名したのださう
 だが、これは本人がチキ／＼人に語つてゐたことだから與太ではありますまい……」

一 千萬人と雖も吾往かん

「で、此の先考の覺右衛門といふ人は不幸中年に失明したため、藤山の物心つく頃には、始終
 家の中で不自由な生活を送つてゐたさうだが、それだけ自分の子の教育には人一倍力を入れて
 未だ五つ六つの時分から、豫て自分の誦讀してゐる四書五經などを熱心に教へた。
 「自ら反みて縮くんば千萬人と雖も吾れ往かん」と言ひましたか、藤山が得意で今日書きなぐ
 る孟子の句なぞも、幼少時代に毎日盲いた父親から繰り反されて、すつかり頭に沁み込んぢま
 った座右銘だ。さうして八つの時に伊萬里の草場船山の門に學んだが、船山は後に學問を以て

正四位を贈られた程の人物で、間もなく東本願寺の學問所に招かれたので、藤山は多くの門
 下生の中から秀才の一人に選まれ、はる／＼京都までお弟子でついて行くことになつた。時に
 明治四年、藤山は九つだつたが、義經袴に手縫ひのブツ裂き羽織、名字帯刀を許された家柄の
 子だからチャンと小脇差をブチ込んで、多くの年長者の中に交つて伊萬里を發つた。此の連中
 は京都の六條に新たに開かれた塾に入つたが、本願寺では一人につき毎月一圓宛の學費を補助
 してくれたので、藤山は郷里から月々僅か五十錢だけ送金して貰つて、合計一圓五十錢で勉強
 した。何んぼ物の安い時分でも、随分切り詰めた學費だつたに違ひありません。
 船山の教育は「君は泉流を汲め、我は薪を拾はん」といふ式で、拭き掃除から炊事まで凡て
 自分のことは自分でやらせる流儀だつたから、未だ筋骨も固まらぬ藤山は年中掌足にザクロの
 やうなあかぎれを切らしてゐた。おまけに勉學の方法も今日のやうな順序立つたのでなく、ま
 るで座布団綿でも詰め込むやうに只もう無茶苦茶に學問を頭腦に押込んだもので、判らうが判
 るまいがそんなことに頓着なかつた。尤もこれは船山の塾のみでなく、當時の漢學塾と云へば

みんな然うでした。

何分雷太は年の行かぬ上に、性來の勝氣であまり無理な勉強をしたせい、二三年の間にすつかり身體を害ねて、今日でいふひどい神経衰弱でせう、ヒヨロ／＼に衰弱してしまつた。

それでも本人は、

「書物を枕にして討死すれば、諸生の本懐です」と健氣なことを云つてブツ倒れるまでやりさうなので、遂に師の船山が見かねて、いろ／＼宥めすかして一先づ國許に歸すことにした。そこで雷太も涙を拭つて故郷の有田郷に歸つたのだが、後年藤山が屢々痼疾の脊髄病に苦しんだのも、或は此の少年時代の無理がすつと後まで祟つたのかも知れません。尤も落雷や出火に驚いて産氣づいて生れた子は、性來骨格に故障の有るのが多いと、世間なんぞで云ひますがね」

一 二十六歳で縣會議長

「それからすつと故郷に居て、明治十一年長崎に始めて師範學校が出来た時、雷太は直ちに入学して官費生で勉強したが、二年ばかりでグ／＼儕輩を超越して卒業し、十八の時母校の教員になつた。振り出しの月給は十五圓だつたさうだが、四年後に三十五圓になり大分生活が樂に出来た。さうでせう、明治十年代の三十五圓は却々悪くない給金だつた。並の者だとそれで女房でも貰つて蝸牛の棲家でもつくるところだが、他日に志を持つてゐた藤山は四年間に節約して貯めた金を懐に東京に出て来て、福澤先生の慶應義塾に入學した。師範校の教員で落付きかけて來た雷太は再び青書生に逆戻りしたのだが、その頃郷里に婿養子の話が出て、伊吹といふ舊家の名を名乗ることになり、養家から學費の補助を受けることになつたので、始めてのびのびと修業をすることが出来た。小糠三合の譬がありますが、當時秀才といふと大概かうした養子の口に入つたものです。

で、時代が恰度例の自由民権論の喧ましかつた明治十七年で藤山なんぞも屢々校内の演壇に上り、政談演説で書生間に鳴らしたものだつたさうだが、これが後年實業界で辯説家の名を謳

はれる素地でしたらう。

兎に角在學三年で首尾よく三田を卒業し、故山に錦を飾つたが、最初は政治家になる志望だつたと見え、その年の中に縣會議員に打つて出て、翌年には議長になつた。時にまた明治二十一年、藤山は未だ二十六だつたから嘸かし本人得意だつたらう。

藤山は長崎縣會議長として、多年の懸案であり難物扱ひをされてゐた居留地事件をスツパリ手術したり、全國に先んじて市に水道を敷いたり、矢繼早やに仕事をやつてみせたので、長崎市民は此の書生議長の手腕に目をパチクリさせるばかりだつたさうだが、藤山は其の功によつて長崎市から感謝状と共に金五萬圓を貰ひ、これで九州改進黨俱樂部を起し西海日報を創刊して益々政治運動といふものに熱中した。然し何分血氣に任せてやるんだから、何處かに蹉跌があつたと見え、翌年にはすつかりおけら、いや品の悪い言葉を申し上げたが、此の金を蕩盡してしまつた。かうなると藤山に軍資金を貢いでゐた養家といふものが愚圖々々云ひ出し、竟り「あんまりやり過ぎる」とでも云ふのでせう。伊吹から離縁話が持ち上つた。時しも明治二十三年

第一回帝國議會の開會の時機が迫つてゐたが、議員に打つて出るには年齢が不足で、これも思ひ止まるの外はない。藤山も當時大分一身の將來に煩悶したが、根が福澤先生の塾で經濟立國を教へられて来た人間だ、こゝでスツパリ政治を斷念して實業界に入る決心をしたが、藤山の眞個の成功はこれから始つてゐますよ……」と増田翁一ぶくつける。

一 芝浦製作所に揮ふ快腕

藤山が三井銀行に入つたのは、故井上馨侯爵のお聲がよりであつたといふ説があるが、當時多少共井上さんに知られてゐたとすれば政治運動のお蔭でしたらう。間もなく三井の大立者中上川彦次郎に認められて先刻申し上げた抵當課長になつたが、中上川の片腕として大いに同銀行改革整理の大任に當つたことは、既に何人かのくだりにお話したと記憶するからこゝには略しませう。

で、整理の結果三井の手に落ちた芝浦鐵工所の長となり、名を芝浦製作所と改稱して、千二

百馬力の蒸汽機械を据付け、技師を歐米に遣つて、電気機械や耐震煙突の製作に取りかゝつた。かうお話しすると何の苦もないやうだが、どうして此の芝浦鐵工所が大難物だつた。これが三井の手に入つた時には組織設備も至つて幼稚の上、内部がいろ／＼に揉めてゐた。そこへ藤山が入つて来て、三井を笠に着て思ひ切つた改革を遣り始めたから、忽ち舊勢力との間に大ゴテゴテが持ち上つた。舊社長田中文恵の一味が裏からこつそり糸を引いて此の時代には稀らしい工場のストライキを起し、藤山の追出しに手段をつくしたが、藤山は飽迄平氣でビシ／＼自分の思ふところを實行し、ストライキの首謀者連を誅にしてしまつて、仕舞ひにはまだ顧問の位置に座つてゐた田中の首までチョン切つちまつた。田中は元々工場の持主で、尙且の藤山の補佐役として働いてゐた副所長守谷吾平の妻君の媒酌人といふ關係まであつたが、藤山はそんなことは見ぬ顔でビシ／＼遣つつけたから堪らない、「あの野郎人間でない」といふところで、何度も短刀を持つた連中につけ廻され、社では藤山の身邊を氣づかつて壯士をつけようとしたが本人悠々として、

「死ぬことを怕がつちや半日だつた生きちや居れんよ」とすましたことを云つた。此の邊例の「千萬人と雖も吾れ往かん」の意氣だらうが、同時に二十代の政治運動で鍛へ上げた鼻ツ張りと度胸骨が随分役に立つたものに違ひない。

兎に角かうして藤山は芝浦製作所をピタリと押へ、以來ガタリとも云はせなくなつたので、「あれなら何處へ出しても充分一人歩きが出来る」と先づ以て三井幹部の信用を博し、一般にもその名が通るやうになつて、財界における藤山の出世の緒口になつた……」

一 事業は難病の妙薬

「芝浦製作所をしつかりしたものにしてしまつた頃、藤山は澄澤（榮一）さんの懇望で、三井を代表して王子製紙の専務取締役になつた。今日の王子製紙は先づ大磐石のゆるぎもない會社になつたが、當時は種々のいきさつで大分左り前になつてゐた。そこで藤山は先づ内部の整理に手を着けた後、製紙原料の選擇に力を入れ、四方の産地に技師をやつて調査させたが、どうも

意に充たぬものばかりで困つてゐる中、頑固な脊髄病が出て寝起きも叶はぬ不自由な身体になつた。此の時三井からも例の藤原銀次郎が王子に廻されて、會社の事務を見てゐたと記憶するが、或はもつとそれは後のことであつたかも知れない。兎に角藤山は毎日病床に社員を呼んで、苦しい指揮を續けてゐた。

すると適々、信州へ遣つて置いた技師から大分有望な報告書を受けた。これを讀んで餘程堪らなくなつたんだね。いきなりかゝりつけの醫者へ電話をかけさせて来て貰ふと、

「儂はちよつと信州へ旅行して來たいのですが……」とやつた。永年藤山の氣性や流儀を知つてゐた醫者も、これには呆れて、

「向ふ見ずも大概になさい。そんなことをすると貴方の身體は生涯床から出られんぞ」と叱りおいたが、藤山は思ひ立つたことをどうしてもあきらめられない。たうとう醫者を出し抜き、四五人の看護人をつけ信州に旅立つて、馬も駕も通じぬ山の中を人夫の背中におぶさつて實地の調査に取りかゝつた。さうして山の中に二月ばかりゐて、藤山が綿密な調査を遂げて東京に

歸つて來た時には、不思議や難病がケロリと治つてゐた。こいつにはお醫者さん二度開いた口が塞がらなかつたさうだが、これに似た話は震災の時によくあつた。

被服廠裏あたりで火に追ひこくられ、夢中で大川に飛び込んで、一晩中熱い水の中に漬つてゐる中、永年のリウマチが綺麗に治つちまつたなんて嘘みたいな話を、儂は本所の人間から聞いてゐる。

で、藤山は早速信州から其の木材を切り出して機械にかけてみると、その結果がまた馬鹿によく、立派なパルプが取れることになつて、これが實に今日王子製紙の基本事業になつた新聞紙用巻取紙の原料パルプになつたんです」

一 男を揚げた日糖事件

「藤山はその後明治三十五年に有志と共に東京市街鐵道會社を創立したり、泰東同文局といふものを拵へて一本立ちで支那貿易をやつたりしたが、あの男が事業界にすつかり名を揚げ、現

在の地位をしつかり掴んだのは、例の明治四十一年の日糖事件の整理からです。

此の事件は天下に有名だから今こゝに真相をお話しするまでもないが兎に角當時會社（大日本製糖株式會社）は千五百萬圓からの負債を背負ひ込み、酒匂社長の短銃自殺に始まつて、磯村専務、秋山常務の收監といふ全く手のつけられぬ状態に陥つたものでした。此の會社の生死は一般事業界にも響きがあつたし、殊に株主に外人が多く、國家の名譽にも關するといふところから、上下で非常に騒いだもの、先づ日糖事件か其の後のシーメンス事件かと云はれて來てゐるくらゐ、いゝ恥さらしの方の親玉だつた。

澁澤さんなんぞも此の事件の納りに随分心配なすつたやうだが、藤山は澁澤さんから二度見込まれて、事件後の整理改革に當ることになつた。以前の王子製紙の場合などと違つて、今度は天下注目の裡に立つて此の難會社の建直しに着手したんだから、男として一世一代の遣り甲斐もあつたらうが、その苦心は並大抵でなく、流石の藤山も幾度か中途で首をひねつちまつたくらゐだ。

然し、困難であればあるほど勇氣と智恵の出るのが藤山のしんいようで、澁澤さんもその邊を見込んだんだらうが、藤山はやがて着々と社内の亂脈を整理し、僅か二年後の下半期には株主配當まで發表して、世間をオヤ／＼と云はせ、

「なあと空景氣のタコ配だらう」なんて悪口を叩かれはしたものの、その後更に五年も経たぬ中にたうとう元利二千萬圓近くの會社債務をすつかり濟して、見事今日の大日本製糖にのし上げてしまつた――

で、これでザツと藤山雷太の成功の経路が判ると思ひますが、何にしても人間は多少強情我慢に出來てゐないと、矢張り出世の力が鈍い。藤山なんぞは正に此の強情我慢が成功の大きな力になつてゐる。小供時分の船山塾からその氣性をあらはして、芝浦製作所の改革がそれ、王子製紙、大日本製糖の建直しと、みんな持前の負けず嫌ひで遣り通したんでさね。それだけ世間の人氣は才子の武藤に及ばぬかも知れないが、由來、自ら反みて縮くんば――の凝り固まり屋だから、御本尊は一向に平氣さうさ。ハツハツハ……」

伊勢の巨豪諸戸清六

(増徳老人第十二話)

一 天下の諸戸

「伊勢の諸戸清六は日本の諸戸、天下の諸戸と云はれたほどの一代の成功者で、これがもう二十年も長生してゐたら、恐らく三井、岩崎、安田の向ふを張つて、中央を何分かしたかも知れないが、惜い哉明治三十九年の夏、還暦祝ひをすませたばかりで亡くなつた。

諸戸の一代記は、古い人だと大概御承知だから、なるべく途中をザツとすませて、正味の出世の緒口に力を入れてみることにしませう……」
と増田翁ちよつと言葉を切つて、

「諸戸清六は弘化三年の正月、桑名郡木曾岬村加路戸新田といふところに生れてゐる。祖父

の清太夫の代までは附近に五十餘町歩の土地を持つてゐて、却々旺んにやつてゐた。加路戸新田といふところは愛知、三重兩縣の縣境、木曾川口の一角で、祖父の清太夫は此の要路を扼し木曾川を上つて来る鹽を一手に引受け、木曾川を下る米穀を買占めてゐた。然るに親父の清九郎の代になつてすつかり微祿し、清六を連れて桑名の町に来て船場町に小さな借家住ひをし、ほそく家業を立てゝゐたが、清六は十四、五の頃家業(鹽と米穀問屋)を引き継ぎ、もう一ツはしやつてのけた。明治何年かには早くも先代以來の借財を濟し、立派な店と住居を建て、手廣く米穀問屋を営んだものです。かういふ器量人だから、其の後僅かの間に桑名の諸戸と縣下に名を知られる人間になつてしまつた。諸戸が御膝元の三重縣下で営んだ事業は、米穀、土地山林、土木、水道と可なり多いが、いち早く伊勢から中央に名を知られるやうになつたのは、矢張り米の思惑から始めた株式界への乗り出しでした……」

一 株式界に雄飛

「今日の取引所の前身即ち東京商社の出来たのは、確か明治六年と記憶するが、兎に角十二年頃の我國の投機熱といふものは非常なもので、少しく投機心のあるものは猫も杓子も仲買人になり、實際には金といふものから縁の遠かつた士族が餘程公債などを持つやうになつたので、急に山氣を出してこれを賣り放つて株を買ひ、百姓は石四五圓の米が十二三圓もするといふので、俄かに膽ツ玉が大きくなつて、これまた株を買ふといふ有様だつた。諸戸は伊勢から立つて銀紙の思惑で先づ儲け、續いて米相場で當り續けてどかりとしいやうを大きくしてしまつた。それから明治二十年から一年にかけて好況時代が再來し、鐵道株などは、五十錢拂込みの兩毛鐵道株式が五十圓、即ち拂込みの百倍といふ馬鹿相場を出したくらゐで、諸戸は關西鐵道株でウンと儲け、伊勢に諸戸清六ありと世間で呼ばれることになつた。此の關西鐵道株では後に、島清事今村清之助の向ふを張つて、諸戸は大いに賣りで戦つた記憶がありますが、兎に角その後例の雨敵や糸平の好敵手として屢々株式市場に活躍したもので、特に日清戦後の馬鹿景氣に乗じて、雨宮、本庄(伊太郎)、加東(徳三)等と共に株式大成金の筆頭に數へられた。

こんなお話をすると、伊勢の諸戸宗の人は機嫌を損じるかも知れないが、兎に角諸戸清六の大をなした抑もは、株式相場にあつたことは見逃せない。その代り諸戸は糸平の如く株式専門家でもなく、雨敵の如く豪膽でなかつただけ、比較的堅實で遂に大怪我がなく、故人の安田善次郎とよく似た點があつた。安田も最初はよく大相場を張つたが、締め時と見切りが實た器用なものでした。諸戸が矢張りそれで、相場をやりながらも、本筋の事業といふものを忘れなかつた。相場即ち事業なりとしなかつた。こゝが偉いので、地道の利殖にかけても、多少奇人と思はれるくらい徹底した逸話が澤山残つてゐる。で、ちつと儂の昔の畑に踏み込み過ぎた氣味があるから、一つ此の邊であまり世間に知れてない諸戸の逸話でも御話しませう。その方が諸戸清六の爲人もよく分る。

何に、出世の緒口ですか？ 實はそいつに少々小説染みを取つておきの話があるので、いつそ終りに残して、拙いさげにでも使はして貰ひませうか……」

一寸時も惜しむ性急家

「先づ古いところからお話しすると、明治十年の西南戦争の時、三重縣から七萬俵の米を徵發することになつたので、當時の岩村縣令は諸戸一家から全部徵發することにして其の旨を通じた。そこで諸戸の曰くさね——

「私一家で出せとならば出しませうが、米は相場もの、もし非常に下落でもすると、諸戸は縣令と結托して金儲けをしたと疑はれるも心苦しきこと。何卒縣下二、三の者にお割付け願ひた

51

「然らば誰々だ？」といふことになつて、諸戸は即座に桑名の誰に何俵、四日市の誰に何俵、さうして自分が何俵と答へたが、果して其の言の如く暴落して、諸戸等はめい／＼利益を見た。些細な事のやうだが、可なり時世のガタ／＼してゐた際に處して、當時三十を出たばかりの諸戸にこれだけの心構へがあつた。

諸戸は常に「氣は小さく腹は大きく」といふことを口にしてゐた。「兎角世間の人間は氣が大きく腹が小さいから失敗する。僕はこれに反し、氣は小さく持ちて腹を大きくしてゐるから失敗することが少ない」と云つてゐたが、却々味へると思ひます。

諸戸の性急は然し有名なもので、或る時米原のケチな宿屋に泊つてゐて急に何か用事を憶ひ出し、いきなり表を通る新聞配達を呼び込んで、

「おい、電報用紙を持つて来い」と命じた。相手は後で新聞を買つてくれるものと信じて、最寄りの局へ行つて用紙を貰つて来ると、今度は電報を打つて来いといふ命令だ。少々様子が變だから、新聞の方はどうなるかと伺ひを立てると「何に、新聞だ？ そんなものは注文せんよ」と平氣で納つてゐるので、配達は大いに怒つて宿屋に談じ込んだが、結局諸戸が相手を宿屋の奉公人と思ひ込んでの間違ひと判つて、そそつかしいにも程があると笑つてすんぢまつた。

かういふ男だから手紙なぞもしよつちゆう汽車の中なぞから出したもので、或る時東京の歸りに濱松で停車すると、諸戸はいきなりホームに飛び降りて、便所の手洗水を携へてゐた硯に汲

まうとしたが、「サア、出ます〜」と驛夫にせき立てられた。是非なく硯に唾してチヨツ〜と書き認め、動き出した汽車の窓から驛夫に手渡しして行つちまつた。竟り時間を尙ぶ、思ひ立つたらずぐ實行するといふ觀念の當時としては非常に發達してゐた人間で、食事の際には、飯を茶碗に二三つよそはせておいて片つ端から搔つ込んだちまつたとか、そこら中に自分の下駄を揃へさせておいて、用事を思ひ出すと何處からでもトツトと出て行つちまつたといふやうな有名な話の残つてゐるのも矢張りこれです」

一 土産は汽車辨の空箱

「時間を惜むくらゐだから、ものを粗末にしないことも番外だつた。汽車の中の折詰の空箱を他人の分までためて歸つて、

「ソレ、お土産だ」と女中に手渡ししたといふのは有名な話。これをどうするかといふと、一丁寧に洗はせてしまつておき、自家の新年宴會の時の折詰に用ひさせるといふ趣向で、廢物

利用もかう徹底すると頭の下つちまふ次第で、桑名には此の折詰を喰はせられた人間が大分残つて居る筈です。又かういふ話がある。宇治山田へ行つての歸りがけ、汽車で津まで来て諸戸は朝日新聞を買つた。朝日はその頃一番値の高かつたもので、やがて列車が龜山の驛に着くと諸戸は新聞賣子に、

「オイ、伊勢新聞とこれを取り換へろ」と云つて朝日を出した。

「駄目ですよ。交換は……」なんて、こいつがにや〜笑つてゐると、

「お前は餘程馬鹿だぞ。朝日と伊勢と取り換へれば一錢儲かるぢやないか。一舉兩得といふことを知らないか」と大きな聲で云つて聞かして、とうとう新聞を取り換へちまつた。これは些事だが、兎に角ちよつとしたことにも損をせぬ、又損をさせぬことに妙を得た人間だつた――

かういふわけで一身を處するにはまことに節約だつたが、一度び筋の立つた話になると存外出し吝みをしなかつた。桑名といふ土地は非常に水の悪いところなので、諸戸は明治三十五年莫大な私財を投じて水道事業を起し、永く町民のために利益を残したなどは世間によく知られ

てゐる話です。

で、五十代にはもう數千萬圓——今日ならば億に當る金——の資産を作り上げ、天下の諸戸で名を謳はれるやうになつたが、明治三十九年の八月還曆祝ひの當日、元氣に任せて赤飯を大きな茶碗に四杯も平げたのが腸胃に祟つて、以來床についたまゝ同年の十一月六十一で亡くなつてしまつた。人間はチツト山家育ちであつたかも知れぬが、何しろもう少々は生かしておきたかつた明治での人物でしたよ』

一 さて成功の緒口は？

『さて、愈々諸戸の出世の緒口ですが、これは昔儂が本人から直接聞いた話で、諸戸がまだ二十歳そこ〜、多分御維新の時の時世と思ひますが、當時諸戸は或る金主から金を引張り出して仕事をやつたところ、これが散々に失敗して二進も三進も行かなくなつてしまつた。そこで、こつそり家財を賣つて五十兩ばかりの金を拵へ、これで何とか方法をつけようとフラツ

と大阪へ出た。最初の考へでは米相場で乗るか反るか試すつもりだつたが、相場はどうも面白くない。然しボンヤリそのまゝ郷里に歸つては金主に面目が立たず、いろ〜思案の末、神戸の外國商館から僅かばかりでも舶來品を仕入れ、これで何んとか格構をつけることに腹をキメた。舶來品だと値打がよく分らぬから、それで一先づ金主を誤魔化して、己れの窮境を遁れようといふ甚だ怪しからん魂膽だつた。

ところで、神戸の商館へ行つてみると、どうして五十兩くらゐの端金では何一つ買へない。さりとて餘り馬鹿々々しいものも仕入れられぬから、流石の奇才子諸戸も萬計つき果て、「まゝよ！ 東京へでも飛んでつちまへ」と、神戸の肥前屋？——何んでもぜんの附く家だつたが——といふ船宿へやつて来て支度をしてゐると、隣室で何にやら若い女の泣き聲が聞える。年寄らしい方が頻りとこれを慰めてゐる様子だが、大分譯がありさうと見て、諸戸はいきなり襖を開けて這入つて行つた。果して由緒ありげな若い婦人と老婆の二人連れだから、「甚だぶしつけですが、餘程御事情のありさうな御様子だが、どうなされた？」といろ〜訊

いてみると、此の二人は主従で、尋ね人があつて東京大阪を二、三度往來したが、どうしても
 旨く行き會へぬ。實は尋ね人といふのは此の若い婦人の夫で、國事に奔走して家を飛び出した
 まゝ、永く音信不通であつたが、風の便りに、今度江戸から改つた東京に居ると聞いて、東京
 へ行つてみると京都へ行つたとのこと、京都へ行つてみると早や二、三日前に東京へ發つたと
 いふやうな始末で、だん／＼持ち合せの旅費も少なくなつて今はどうすることも出來ず、夫の心
 持も知れぬので心細さの餘り老婢と啣つてゐた——といふまことに以て氣の毒な話だ。

そこで諸戸が、

「然らば貴女の御主人の名は？」と尋ねると、それが誰人にも云へるくらゐなら、かうして東
 西を空しく往來はせぬといふしつかりした言葉だ。大分御亭主に遠慮してゐる模様だから、諸
 戸もこれは愈々由緒のありさうな婦人と心中に感じた。果してあつたんだが、兎に角氣の毒千
 萬と思つて、

「それでは私が東京までお送り申さう」と云つたが、相手は諸戸があまり無造作なので、反つ

て信用し兼ねるといふ面持です。

そこで諸戸は、

「私は桑名の諸戸清六といつて、多少桑名では知られた家の者だ。尤も昨今は商賣に手詰つて
 これ／＼の譯で東京へでも飛んで行かうとしてゐたところだが、是非行かねばならぬ身の上で
 ない。然し貴女方は足弱の女連れ、路用がなくてはどうにもなりません。兎に角こゝに五十
 兩ばかりの持ち合せがあるから、此の中三十圓だけ御用立をさせよう。是非これでもう一度東
 京をお尋ねなさるがよろしい」と、ムリに渡してしまつた——

それから諸戸は此の二婦人と途中まで同船して自分は四日市で船を下りて、

「あゝ、イ、ことをした」と、ただそれだけで桑名へ歸つちまつた。こんなことは諸戸にして
 も生涯に唯一度でしたらう」

一 大藏卿の呼出し

「で、これから四、五年経つて、諸戸もどうやら一人前の人間になりかけてゐた頃、突然桑名郡長の佐藤義一から、

「岩村縣令から君を縣廳に連れてくるやうにとの話があつたから同道してくれ」と云つて來た。何事だらうと、諸戸は早速縣廳に出頭してみると、岩村は丁寧に分の室に通させて、

「實は大藏卿の大隈(軍信)さんから、是非君を連れて上京しろとの仰せがあつたのだが、甚だ出し抜けの話で私にも考へがつかん。諸戸君に思ひ當りはないかね？」と訊かれたが、諸戸だつて籤から棒で見當がつかない。

「どうも判らんですな……」

「兎に角君を連れて來れば分るといふ話ぢやつたから、それではこれからすぐ東京行の支度をしてくれ給へ」といそがしい話です。そこで諸戸は少々面喰ひながら岩村縣令と共に上京して大隈さんの邸に行つてみると、

「ヤ、君が諸戸君だね！ 先年は愚妻が飛んだお世話に預つた……」といきなり大隈さんの

こんな言葉だ。

諸戸は何か胸に思ひ當つたことのある氣がしたが、さつそくに憶ひ出せないでゐると、

「ソレ、神戸の船宿で……君の俠氣によつて三十圓借りたあの女が儂の女房だ」

「オ、それでは……！」

「甚だ面目ないやうな次第ぢやが、當時儂は未だ〳〵京都と東京の間が忙がしくて、國に残して來た妻の身などはトント忘れて飛び廻つてゐた……馬鹿なやつらで、東西に多少知合だつてあつた筈だが、要らぬ遠慮をして苦勞をすつたわけさ。ハツハツハ……」と大隈式に呵々大笑した。

そこへ當の奥さんが自身で茶を汲んで持つて出て來られ、厚く當時の禮を述べたので、諸戸は殊更、

「いや、これは〳〵……」と恐縮してみせて、すつかり話が持てちまつた。

こんなことで諸戸は維新政府の大立者大隈さんに親しく知られ、更にこれを手蔓にして所謂

権門の許をあちこち歩いて、四、五年の間に都合のいゝ金儲けを種々搦んぢまつた。諸戸清六の出世の緒口は即ちこれ。随分凝つた話のやうだが、維新の前後にはこんな話はザラで、寧ろ大隈さんあたりが國事に奔走して、家庭を省みる暇のなかつた有様が目に浮かぶやうです。尤も維新の元勳方はみんな祇園あたりにいゝのがあつて、第一夫人は多少御國許で閑却にされた貌も莫きにしもあらずではあつたんでせうがね。アツハツハ、』

芝居國の王者大谷竹次郎

一 劇場賣店の賣子

芝居王國の統帥者大谷竹次郎を大成功者の一人に數へ擧げることには、誰しも異議の無いところだらう。實際白井・大谷の兄弟の手で、僅々三十年間に爲し遂げられた劇場トラスト實現の努力は素晴らしいものだつた。最初彼等は關西から身を起し、傳統と因習以外全く他よりの侵略

を許さなかつた東都の劇壇を席捲して、東西一流の劇場と俳優を悉くその傘下に統轄し、遂に今日に見るが如き松竹王國の陣容を實現し得たのは、到底尋常手腕では企て及び難いところである。然も彼等は舊芝居小屋の出方や男衆から成り上つたのである。今日の地盤も勢力も、全く腕一本歴一本から叩き出したのである。

大谷兄弟は兄を白井松太郎、弟を大谷竹次郎と呼ぶが、彼等は人も知る如く双生児だ。由來双生児は、その出来がいゝやうに俗間に云はれるが、此の意味に於て彼等は好個の活標本である。白井・大谷の兄弟は、明治十七年京の三條通りに生れた。先考を榮吉といつて鹿兒島藩士森田某の子だつたが、後故あつて、京都で宿屋をしてゐた大谷茂兵衛の養子となり、後妻を貰つてから芝居の賣店に手を出した。此の榮吉は士族上りにしては却々働き者で、京都祇園座から始めて大黒座、阪井座と次々に賣店を殖やして行つた。尤も賣店と云つても、今日のやうな氣の利いたものでなかつたことは云ふまでもなからう。

で、榮吉が賣店の經營で幾らか懐に遺した時、阪井座は不入り續きでどうにも小屋が立たな

くなつて来た。そこで自分も出資者の一人に加はり、腐つた劇場の挽恢復策に苦心をしたのを、

金主の大浦新太郎といふ資産家が見込んで、

『いつそ榮吉に全部を任した方がよさそうだ』といふことになつて、始めて興行界に乗り出した。これが後年の京都歌舞伎座である。

大谷兄弟は少年時代からかういふ空氣の中に育つたので、云つてみれば藁の上からの芝居者である。未だ親仁さんの榮吉が賣店をやつてゐた時代には、此の兄弟は店の賣り子になつて、湯茶や辨當を下げて、出方同様に廣い劇場の中を馳けすり廻つて働いたものだ。大谷が一時役者の男衆をしてゐたと云はれるのは、もつと後のことだ。これに就いては或時親方(俳優)から、『竹々』と扇子で頭を叩かれて呼ばれたのを『へ、……』と慍りもせず笑つてしまつて『今に見ろ！』と心中に叫んだといふ有名な逸話が残つてゐる。

一 粘ばりと踏んばり

兎に角、親仁の榮吉が阪井座に手を入れてからの兄弟の奮闘振りは實に目醒しいものだった。一家は年中劇場の中に寝起きして、それこそ寝ても醒めても阪井座の繁昌を忘れなかつた。かうして、腐りかけた劇場の景氣も幾分立ち直つて来た明治三十四年の七月、親仁さんの榮吉が急病で亡くなつたので、大谷は若い身空でその後を引き受け、早くも一本立ちで興行界に乗り出すことになつた。

これと前後して兄の松太郎は、夷座の賣店白井龜吉といふ者の養子となり、大黒座を買収して矢張り興行界へ一旗擧げかけてゐたので、茲に兄弟は大いに協力して、劇界への發展を策することになつたのだが、油斷も隙もない芝居者の世界で、實の同胞がしつかり手を握つて進んで行つたことは、何んといつても非常な強味だった。後年大谷が『私の成功は一に兄白井松太郎のお蔭だ』と繰り返して云つてゐるのも、實にこゝのところである。

かうして兄弟は明治三十四年から八年に至る五年間に、京都常盤座、岩神座、南座等を彼等の掌中に收めた。殊に南座は京都隨一の大劇場だったが、大谷は『大きくなつてしまふまでの

困難だ。そこへ行くまでは唯「驚然に進まふ」といふ信條を眞向に振り翳して、矢繼早やに劇場を手に入れて行つたのである。

然るに折柄日露戦争が始まつて、世間は芝居どころの騒ぎではなくなり、各劇場は何處もガラ空きの有様になつた。大谷兄弟も戦争には敵はなかつた。彼等は俄然元の木阿彌となり、再び立つこと能はざるやに思はれたが、兄弟は凡ゆる智慧と才覚を以て、此の難關を突破することに努め、戦争眞最中の三十八年の一月常盤座を明治座と改稱して、血の出るやうな金で新築し、同時に松竹合名會社といふものを創立した。兎も角劇場の經營なんでものは難中の難事で、並の者だと大概もう此の邊で挫折してしまふのだが、彼等には異常なねばりと踏ん張りがあつたのである。

一 東都劇壇の乗取策

日露戦後、戦勝に酔ふて世間の景氣は著しく活氣を呈して來た。大谷兄弟が此の機運を取り

逃す筈がなかつた。そこで先づ關西劇壇の大立者雁次郎に接近し、大阪の中座を借りたのを好機として、兄の松太郎は大阪を繩張りに續いて朝日座、文樂座を手中に收め、弟大谷は京都に踏み止つて前記の諸座を經營したので、松竹合名の名は漸くにして全國の演劇界に喧傳されるに至つた。

隴を得て蜀を望む人間性が大谷は強烈だつた。彼は當然食指を東京の劇壇に向つて動かし始めた。芝居といふやうな限定的な事業は、トラスティックの威力で押へつけてしまふのが有利である――

斯くて明治四十三年、彼は遂に東京に乗り出した。先づ新富座を手に入れ、續いてその年の九月本郷座を我が物にしたが、時好を洞察して大向ふの人氣を掴むに敏な彼は、よく江戸ツ兒の意氣に投じて、二座は忽ち破れツ返るやうな大入りを續け、大谷來の聲は早くも東京の劇場を風靡した。そこで翌四十四年、兄の松太郎が角座、浪華座を買収して、大阪の主だつた劇場全部を手に入れてしまつた働き振りに負けず、四十五年には明治座を手に入れ、大正二年愈々

目指す歌舞伎座の乗取りに着手して、同五年に完全にこれを征服してしまつた。就中歌舞伎座は、當時例の蟹甲將軍井上角五郎の經營で、斷じて大谷の手には渡さじと、江戸ツ兒の意氣を示してゐたのだが、彼は先づ松竹事務所を歌舞伎座近くの築地河岸に設け、漸次その株を手に入れて絶對過半数の大株主となり、否應なく落城せしめてしまつたのである。歌舞伎座の乗取りは松竹の事業の上に、確かに一のエポックを劃した。これで大谷は東京の劇壇に於ても完全な勝利を得たことになつた。其の後は彼の勢力の赴むところ、草木も靡くが如き有様で、麻布南座、辰巳劇場、帝京座、最後に問題の市村座と、凡そ劇場と名の附くものは片ツ端から買収した。最近に於て残る帝劇まで手に入れてしまつたのは、世間の記憶に新たなるところで、かうして彼の東西劇場統一の計劃は、完全にその目的を達したのである。

一 鬱勃たる事業慾

で、大谷の事業慾は劇壇にのみ止らなかつた——彼は芝居に成功すると共に映畫事業に手を

出した。即ち大正十年松竹キネマ株式會社を創立して、蒲田に撮影所を設け、果然映畫界に堂堂たる進出振りを示した。その後京都下鴨にも撮影所を開き、東西呼應して映畫の製作に従事する一方、全國の主要映畫館を悉くその直營若しくは特約館として、最近では帝キネを初め阪妻、右太衛門等のプロダクションをもその傘下に抱擁し、先達日活を凌いで斯界の勢力を縦斷するに至つた。恐らく彼は映畫事業に於ても、劇界同様のトラストを夢みてゐるに違ひない。大谷の事業的手腕は、震災によつて一時東京各座全滅の大打撃にめげず、銳意恢復に努力して、忽ち今日の陣容に立直し得た一事を以て證明される。全く松竹は大谷あつてである。松竹の幹部には城戸、井上、堤、向山、龜田と可なり多士濟々だが、社長の大谷の前にはちよつと頭が上らない。所謂貫祿の違ひのみでなく實力の差なのである。大谷は實に八面六臂の働きをする——

彼は脚本の選擇、役者の振り割り、各座狂言の並べ方まで、一切合財自分の手で作り上げねば承知のならぬ時代があつた。また毎日各座の入りを見て歩いて、今日の歌舞伎は何人、明治

は何人と、およその頭勘定をしてみせるのが事務上の數字とピタリと一致するといふから偉いものである。かうなれば事業も確かなもので、幾ら手を擴げても飼犬に手を噛まれる心配も先づない。

由來芝居道は情弊鬱積で、内部に種々な勢力争ひ、暗闘の醸され易い社會だが、はるく關西から東京に乗り出して來た大谷は、これに對しても却々徹底した態度を取つて來た。譬へば内部に二勢力の争ひがあつて、互ひに排擠嫉視を事にしてゐても、大谷は寧ろ平然と乾分の喧嘩を高見の見物する。即ち或る場合には、兩者を喧嘩させておく方が主權者にとつて有利なのである。二勢力相争へば、自然双方のボロが彼の耳に入り易いし、競争心の赴むところ兩者共に忠勤を抽んずる結果ともなるのだ。——こゝらが大谷の傑出したところだと言ふ者がある。

而して彼は常に曰く『私はこれまで金を残す氣を少しも出さなかつた。金よりも事業が私には大切だつた。事業を只管大きくして行くことが、私の目的であり理想だつた。さうしてこれ

が自分の今日を得た所以であると信じてゐる。

幕末の奇傑三野村利左衛門

一 財界不世出の策士

奇傑三野村利左衛門の名は、今の若い人にはやゝ親し味が薄いかも知れない。併し一度明治の財閥史を繙くならば、我國政商の大先達——あまり賞めた先達ではないが——として、將又三井の柱石として、到底此の名を逸することの出來ぬ偉大な存在となつて來る。

彼は幕末維新のあのシユツルム・ウント・ドラックに乗じて、突如彗星の如く財界の一角に現はれ、奇略縦横、幕閣の要路や維新の功臣を手玉に取つて、財閥三井の基礎をして泰山の安きに置くと共に、自己の榮達出世を恣にした一代の智囊、不世出の策士だつた。只惜むらくは、その爲すところ畢竟三井の利益を出でなかつたのと、比較的短命に世を終つたために、そ

の光芒は歲月と共にいち早く世に薄れ去つた憾みのあることである。

で、近來幕末當路の人物として、勝海舟や山岡鐵舟より、寧ろ小栗上野介あたりが彼此世上で論議される傾向になつたが、此の種の社會的待遇に於て、三野村の人物は多少小栗に似通つた點がある。一は幕閣の權勢として早く刺客の手に倒れ、一は財閥三井の懐刀として活躍半ばにして逝いたためにそれほど名が傳はらぬ。(殊に三野村は或る意味に於て維新の隠れたる功勞者である)即ち死ぬ者貧乏であつた。然も此の兩者は大體その時代を同じうするのみならず、その關係に於て、切つても切れぬ腐れ縁があつたから益々妙である。三野村の出世の端緒は、實に小栗の籠絡と利用にあつた——

三野村の

由來三井の畑には、切れ味の鋭い人間が多いとされて來てゐるが、實際を云ふと三野村を以て絶後とする。三井の基礎は三野村の力に因つて礎石を打ち込まれ、後輩中上川彦次郎の手で地盤を固められたかに云はれるが、その智謀膽略に於て、中上川は遂に三野村の敵でない。三野村は匕首を懷にして談笑平素の如き無双の辣手だつた。觸るれば必ず切れる凄い切れ味があ

34

つた——

と、先づこれだけ前置しておいて、愈々本題に取りかゝることにしよう。

一 朋輩三人を斬つて出奔

三野村は其の一生が劇的色彩に富んでゐる如く、その生立も宛然一個の講談的話材である。彼は出羽の酒井の家臣で、槍を取つて天下に高名だつた木村又太郎の嫡子として生れた。(一説には養ひ子とも云はれる。)

然るに十五の春、君侯晴れの御前試合に於て、見事五人抜の勝負に打ち勝つたところから朋輩の怨みを買ひ、鎮守の夜祭に參拜の歸途を擁されて無法の白刃に取り圍まれたが、當年十五の利左衛門は振袖姿で奮戦し、とど三人を斬つて捨て、悠々その場を引揚げた。その夜父母に盡きぬ別れをして出羽を出奔し、暫く大阪へ行つて放浪の月日を送つてゐたが、後、神田三崎町の菓子屋紀伊之國屋利八といふ知る邊を頼つて江戸に出て來た。此の利八の女房お辰といふ

のが元木村家で、永年召使つた女で、三野村は御主人の若様といふ取扱ひで、紀伊之國屋の二階に權八をキメてゐた。すると利八夫婦の間に文枝といふ愛娘があつて、これが若殿育ちの三野村に何時しか思ひを焦がし、長い袂で男の背中を叩いたりしてゐたが、肝腎の親達まで見て見ぬ振りをしてゐるので、三野村もついほだされ、ともなく文枝と懇ろになつてしまつた。そこで利八夫婦から懇望される儘に、彼は正式に紀伊之國屋の婿養子となり、野暮な大小をサラリと捨て、昨日に變る前垂れかけの姿、紀伊之國屋の店先に座つて、侍育ちにしては如才のない應待振りを客に見せることになつた。これが彼の商人として世に立つ抑もの振り出しだつた。

一 鋒芒を顯す好機

と、茲に早くも奇才三野村の鋒芒を顯はす無二の機會がやつて來た——
當時神田の鎌倉河岸に豊島屋といふ白酒の醸造家があつたが、江戸で白酒と云へば豊島屋と謳はれたほどの老舗、上は將軍家の臺所から三百諸侯、大小旗本屋敷に出入りして、商ひもの

の白酒を納めると共に、懐の苦しい大名や旗本に金融をして、すつかり資産を太らしてゐた。然るに一、二年來いろ／＼商賣の手違ひから内輪が大分左り前になつて、今や貸した金の回収でもつかぬと、流石の大家も倒産といふ悲運に際會した。當主の嘉兵衛を初め血眼になつて百方貸金の回収に奔走したが、何分相手は二本差の大所ばかりだから、却々オインレと取立てる仕儀に行かぬ。利八は以前豊島屋の酒倉に働いてゐて、特に嘉兵衛から目をかけられ、菓子屋の店まで出して貰つた關係があるので、御家の大事とばかり毎日豊島屋に詰めかけて協議に預つてゐたが、固よりたいした智慧は出ない。

で、一日、利八の口から詳しく此の事情を聞いた三野村が、
『それは御氣の毒千萬な。如何でせう、私が一つ乗り出して、豊島屋さんのために目鼻をつけ進ぜませうか』といふ頼むところありげな言葉だ。大體菓子屋風情の自分には過ぎたる養子の利左衛門、利八は一も二もなく喜んで、早速豊島屋へ行つて此の旨を話した。
溺れる者は藁でも掴む、まして利左衛門の來歴を一通り聞いてゐたから、

「お前のところの養子は大層な出来物だといふ話、何か考へがあるに違ひないから、早速来て貰ひませう」といふことになり、三野村は駕で迎へられて豊島屋に来て、主人の嘉兵衛に會つて何事か自分の意見を述べてみた——

「成程、貴方は才子だ！ さうなうては逆も私の貸金は取れますまい。何分ともにお願ひします」といふ熱心な頼み。

「然らば念のため手前にすべてを任したといふ一札を頂戴したい」と云つて、三野村は先づ今日でいふ委任状を一札取つた。

かうして其の翌日、三野村は何事か胸中に秘策を疊み、豊島屋の大番頭和平といふのを一人連れて、當時幕府隨一の利け者として飛ぶ鳥な落す權勢を振つてゐた小栗上野介の役宅にやつて来た……

一 小栗上野介の一喝

やがて両者は小栗の面前に通されたが、豫ての打合せ通り、先づ和平から三野村の來歴を手短かに小栗に紹介した——

「ほう、左様か……木村又太郎と申せば槍を取つては天下に高名の人物、出羽の酒井殿御自慢の侍と儂も聞いて居る。その總領が其許か、變り果てたものだ……」と言葉に皮肉を持たせて、吊上つた切れの長い目でデロリと三野村を見た。

「はて、父の名御聞き覚えとあらば背汗至極……したが、大小こそ捨てましたれ、心は昔ながらの金鐵のつもり、お身近う御召出し下されても、決して御不審を蒙るやうの儀は、心の刀に誓つて致すまじき所存。御見識りおかれまして今後とも宜しく御引立を願ひたく存じます」と上目づかひに小栗の鋭い視線を睨み返して、淀みもなく言つてのけた。囊中の錐は既にその鋭い切尖を顯はしかゝつてゐた。小栗ほどの人物、一瞥でこれが分らぬ筈はない——

（豊島屋め、和平で用が足りぬと見て、一筋縄で行かぬ奴を寄越しおつたぞ！）と早くも苦惱の色が眉宇のあたりに閃めいた。小栗は當時矢張り豊島屋から五千兩ばかりの融通を受けてゐ

て、とうに期限が切れてゐたので、再三和平が伺ひを立てに来てゐたのだが、何時も一喝で追ひ歸してゐた。然し今日のは左様簡単に片づきさうもないと見たから、寧ろ先手を打つて歸さんと、

「此の頃は役向繁多ぢや。何用か早く聞かう」とかう云つた。

「は、豫て御聞覚えもありませうが、此の度豊島屋事却々の難澁にて、此の儘にては身代仕舞と相成るやも知れぬ有様、何卒格段の御憐愍を以て、是非共彼れが家の立ち行きますやうこちら様にても……」

「執拗いッ！」と小栗の大喝が三野村の頭上に落下した。

「これ、その儀ならば再三再四和平に申し聞けてあるぞ。返さんのではない。只今少々都合がある」と口を酔くして申して居るのだ。一體過分の利益を取りながら、一度び己れに都合があれば、前後も辨へずに手前勝手なる言分を申す奴。抑も豊島屋が今日の分限になつたは誰のお蔭ぢや。みな諸侯旗本の血を吸ひ取つてのこと。此の上とも増長致すにおいては先づ此の小栗が

その分にはさしおかんぞ」と面色變じて大變な見幕だ。

相手は剛腹果斷を以て鳴る小栗上野介、どうなることかと、和平は側で手に汗を握つた……

一 上野介を飜弄す

三野村は然し一向に動ぜず、唇邊に微かな薄笑ひの影さへ漂はしながら、小栗の怒號の終るのを待つてゐたが、やがて徐かに顔を上げて、

「仰せの儀、とんと解しかねまするが……」と、ケロリとしてこんなことを云つた。

「何に分らぬ！」と小栗の眉が昂る。

「されば、只今御叱りによれば、豊島屋は御當家にも金子を御用立申し上げたるやうの御言葉なれど、左様の儀は、手前實以て聞き及んで居りませぬ、とかやう申し上げたので……」

「何に、何んと申す?!」と流石の小栗も、折角一矢を放つたものまるで的も何もなかつたやうな拍子抜けの體で、迂散臭さうに三野村の顔を睨み据えた。

「先程和平よりちよつと申し上げおきました通り、手前は豊島屋より此の度びの一切を引き受け、御歴々方の御念書はもとより、白酒半樽の小口までも、およそ證文と名の附く類は悉く手前の許に集めてござります。したが、御當家様に限つては、一文半錢の御書附も見當りませぬ。これは利左衛門、手前の首にかけて申し上げます」

「……………」

「數ある御歴々方中にも、御當家は御公儀の財政を御切り盛り遊ばす御役柄、聖人の所謂「先づその家を齊ふ」或ひは「家を齊めて而して後國治る」とか申す至言をそのまゝに、先づ御自身の御家政を御齊め遊ばして、身を以て範を天下にお示しに相成る御覺悟と、實は心より恐れ入つて居りましたる次第……尤も爾う無うては、一國の財政、御公儀の御勘定向を御切り盛り遊ばすことは出来まじと心得ます。兎も角、町人風情より御融通遊ばされたなぞとは、減相もなきことにござりませう」とペラ／＼煙に巻いてしまつた。

流石の小栗もスツカリうだつちまつて、

「ウム、左様か……」と間の延びた合點を打つてゐたが、早くも相手の意中を悟るところがあつたのだらう——

「三野村とやら……」

「は、……………」

「その方先刻、予の憐愍によつて是非とも豊島屋の立ち行くやう致してくれとの言葉であつたが、それは如何なる筋の願ひぢや？ 腹藏なく今一度申してみるがよいぞ」と云つた。

颯風既に一過して、話によつては出来るだけの助力をしてやらうといふ腹が充分に見えたから、三野村は、につこり笑つて、

「さればでございます。御當家様の御威光を持ちましてお歴々方へ對し、武家名聞のため何を差措いても豊島屋へは金子をお戻しに相成るやう、御申觸れを願ひたき儀にございます……」

「ウム……………」

「尤も、御役目の表向きよりお觸れを願ひましては如何とも存ぜられますが、ほんの御一人の

御氣附きとして方々へお話し下さらば、豊島屋此の上なき冥利と心得ますので……」
これで小栗に萬事が讀めた。貴方に對する五千兩は棒引にするから、その代り他の貸金を旨く濟させてくれ、骨を折れといふ注文だ。而かも表面の理由は武家名聞のためといふのだから幕府財政の當路者として満更關係のない筋合ではない。否、非公式の程度なら當然やつて然るべき筋だ――

（此の小僧、巧く持つて來をつたぞ！……）と小栗は改めて三野村の顔をじつと見て、
「尤も至極の儀ぢや。必ず其方の願意に相適ふやう取計つてつかはさう。和平、此の三野村は却々の才物ぢやな」とこんなことを照れかくしに云つて、小栗上野介、到頭豊島屋の貸金督促係りを引受けてしまつた。

一 幕政裡に活躍する利權屋

で、間の話は抜きにして、これで豊島屋の家運は忽所に挽回した。三野村の苦肉の計もさる

ことながら、當時に於ける小栗の勢力といふものは、此の一事を以てよく分る。

爾來小栗は三野村の才幹の大いに用ふ可きを識り、三野村亦小栗の俱に談するに足ることを悟つた。そこで始終その私邸に出入してゐる中、三野村はすつかり小栗に喰ひ入つてしまつた。恰度今日の私設秘書のやうな格で、彼は小栗の手を通じて幕閣の要路や、旗本中の利権者と脈絡を通じ、種々幕政の裏面に活躍して、利權の獲得に狂奔？ した。然し、決して士分に列したわけではなく、何處までも彼は政商的に自己を築き上げて行くつもりであつたか、やがて表面地金銀の賣買といふ商賣を始めた。さうして彼の當時取扱つてゐた多額の地金銀が、果してどの方面から出て來るのか、その道の者にも大きな謎となつてゐたと云はれてゐる。兎に角此の商賣は得意先が兩替店である。三野村は營業の實力が加はると共に、當時兩替の本家と云はれた駿河町の三井兩替店とも取引を生じて來た。彼は、三井の大番頭として江戸の店を總轄してゐた齋藤純造に知られた。齋藤は豊島屋一件を振り出しに深く小栗の懐に喰ひ入つてゐるらしい怪物三野村を粗略に扱かはなかつた。かうして三野村と三井の間には、抑もの因縁が結ば

れかけてゐた――

茲で鳥渡三井家のことを記す必要がある。

一體三井家の祖先は立派な殿上人で、北家御堂關白道長の四男宗長以來連綿と續いた家柄ださうだが、後甚だ窮迫し、その子孫の一人が伊勢松坂の越後屋といふ小さな呉服屋からのして遂に天下の巨商となつたものである。従つて三井だつて最初から旨いことばかりがあつたわけではなく、幾度か家運の浮沈に遭遇して來たのであるが、就中幕末維新の大變動期に於て一再ならず倒滅の危機に際會したものであつた。而してそこへ奇傑三野村が外部より現はれて、見事三井の土壇場を救つたのである。

一 暗黒政治の高壓手段

當時、幕府は財政的にも全く斷末魔に陥つてゐた。そこで小栗あたりが、「背に腹はかへられぬ。先づ三井あたりから搾り上げて、此の難場を切り抜けよう」と老中間

に獻策すると、

「成程、それが可からう。公儀の威信を論じてゐる場合でない」と暗黒政治の密議が一決した。そこで幕府の勘定奉行から駿河町の三井兩替店に向つて「當主若くは當主に代つて責任ある人物即時出頭すべし」といふ、意味の差紙が立つた。三井の方では當主高福は京都の本邸に常住してゐて、江戸の店は上記の齋藤が締め括つてゐたのだから、さしづめ此の齋藤が奉行所へ出頭する順序だつた。

齋藤はこれを見て顔色を變へた。従來は此の種の召状の前に必ず相當な侍が來て、内々金高其の他の條件を取り決め、それから勘定奉行所へ出頭する慣例になつてゐたのが、今度ばかりは差紙の字句からして甚だ高壓的で、下手をすれば御用達の二軒や三軒ブツ潰すつもりである。幕府の死に物狂ひの腹が十分に讀める。齋藤は安らかならぬ氣持で奉行所に出頭してみると、果して案じた通りの結果で、五十萬兩の金を十日以内に上納しろといふ厳しい達した。上納即寄越せの謂である。三井は白晝公然と強盗に入られたやうなものであつた。然も此の強盗

は、返答次第でどんな真似もやりかねまじき物騒至極な相手である。近來金權の前に屈従の兆を示してゐた武門は、俄然その假面を脱したのである。

齋藤は更に青くなつた――

「甚だ恐れ入つたる次第なれど、今日の仰せつけ、チト手前に於てはかりかねる意味合ひに心得まするが……」と必死になつて、今サツサと云ふだけのことを云つて立たうとしてゐた勘定奉行の袖を控えた。

「何に、解せぬ！」と冷たく笑つて、

「其方は三井の大番頭、よもや上納の意を解せぬほどのうらたへ者でもなからう。上納ぢや！ 仔細は追つて沙汰する筈、サ、立ちませい」と、ポーンともう袖を拂はれてしまつた。

齋藤は悄然として店へ歸つて來た。三井は當時存外内幕が手詰りになつてゐた。従つて幕府の誅求に應ずれば、當然倒産の運命を免がれぬことになる。彼が此の難題に困り果てた時、ゆくりなくも思ひ出したのは怪物三井村利左衛門の存在だ！

「然うだ、三井村！ あれは豊島屋で名を揚げた男だ。此の上はどうしても彼れの働きを借りて、小栗様あたりを突き崩すより他に思案があるまい。ウム、よいところに氣が附いた」と齋藤は俄かに暗雲の霽ると思ひで、即刻三井村の住居へ迎ひの駕を出した。

一 巨商三井に泣きつかる

それから一刻あまりの後、三井村は柳橋の旗亭萬八樓の離れ座敷で齋藤と會つてゐた――

「三井村さん、かやうな譯で、どうしてももう一度貴方に豊島屋の二の代りを出して貰はぬと三井が立ちません……」と齋藤は三井村の出馬を懇請した。

平素の如才なさに似ず、

「フム」と唇を引き締めたまゝ、三井村はむんづり腕を組んでしまつた。

「……したが、今度の相手は何んといつても公儀、どんな飛ばつちりが貴方にかゝらうかも知れません。萬一貴方の御力でも及ばぬ場合は、どうせ潰される三井です。さあ危いと知つたら

根こそぎやられる前に相當の金を隠して、貴方だけでも別の舞臺で働ける工夫をしておくつもり。若しまた上首尾にやつて下すつたら、三井の商賣を半分くらゐ御裾分けする考へで居りますが……」

無腰の町人になつても、武士の魂まで失つてゐなかつた三野村は、此の條件が氣に入らぬやうに見えた。

「齋藤さん……」

「……………」

「遣り損じたら、いつそ共倒れの覺悟で行かうぢやありませんか。三野村は天下の三井さんと情死するなら異存はありませんよ」

「成程！ これは私が至らなかつた……」と齋藤が頭を搔かうとすると、

「その代りだ。若し上首尾に行つたら、いつそ私を三井の人間にして貰ひたいのだが……」

「何に、三井に使はれて下さる?！」

「左様さ。どうせ茲で一ト芝居打てば、これまで最負にしてくれた小栗とは喧嘩別れになる筈、さすれば私も初手から一切これまでの行掛りを捨て、三井家のために一か八かの働きをするこゝとが出来来る。いつそ頼まれ甲斐があるといふ次第ですよ」

「いや、それなれば願つたり叶つたり。屋臺骨ばかり大きくとも、かやうな場合に役立つ者の一人も居らぬ三井、貴方のやうな方が一枚加はつて下すつたら、嗚かし主人の高福も悦びませう。必ず手前から上座にお据え申し上げる」

「いろ／＼我儘を申して却つて恐縮至極、兎に角私に一策あるから、萬事お任しなされるがよろしい。齋藤さん、案ずるより生むが易しかも知れませんが……ハツハツハ」と三野村は何時しか侍言葉に復つてゐた。

一 短刀を懷中に強談

三野村は其の晩自分の住居に歸ると、すぐに二階に上つてしまつて、何事か血を絞るやうな

工夫をこらしてゐた——

やがて大きな奉書をのべて、一字々々楷書で丁寧（ていねい）に認め、これを細く疊んで、最後に「上」の一字を達筆に書いた。而して翌朝、未明（みみ）に入浴（にふよく）して身心（しんしん）を潔（きよ）め、秘藏（ひざう）の短刀（たんたう）を懐（ふところ）にして駕（か）で小栗（こぐり）の私邸（しきてい）に出かけて行つた。

此（こ）の會見（くわいけん）の模様（もよう）を詳細（しんじゆ）に記（し）せると面白（おもしろ）いが、遺憾（いかん）ながらそれは永久（えいきう）の謎（めい）となつてゐる。兎（と）に角三野村（かくみのむら）から渡（わた）された奉書（ほうしょ）を開（ひら）いて行く中に、小栗（こぐり）はみる／＼顔色（かおいろ）を失（う）つた——

「ぶ、無禮（ぶれい）！ 忘恩至極（ぼうおんしごく）ツ」とビリ／＼にこれを引き裂（き）いて、物凄（ものすご）い怒聲（どせい）が玄關（げんくわん）あたりまで聞（き）えたので、家來（けらい）の一人（ひとり）が氣遣（きづか）ひながら廊下（らうか）を近づ（ちか）づいてみると、室（むろ）の中には何事（なにごと）かただならぬ氣配（けい）が漂（た）つてゐて、

「誰（たれ）ぢや！」と主人（しゆじん）から鋭（す）どく一喝（いっかく）され、狼狽（わうたい）して引退（ひきまが）つてしまつた。此（こ）の時（とき）三野村（みのむら）は懷中（くわいちゆう）の短刀（たんたう）をしつかと握（にぎ）りしめ、罷（ま）り違（まちが）へば小栗（こぐり）と刺（さ）しちがへる位（くらい）な意氣（いき）込みで睨（にら）み合（あ）つてゐたものらしく、小栗（こぐり）にしてみれば、相手（あひて）をハツ裂（さ）き、弄（もよ）り殺（ころ）しにしても慊（あき）たらぬ奴（やつ）と忿怒（ふんど）はしたものの

結局（けつぎゆ）自己（じこ）の地位（ちゐ）を考（かんが）へ、素浪人（すらうじん）三野村（みのむら）づれと情死（じやうし）するの愚（ぐ）を避（さ）けたものと想像（さうぞう）される。やがて三野村（みのむら）は多少（たう）興奮（こうふん）の名残（なご）りを片頬（かたほ）に示（し）したまゝで、悠々（ゆうゆう）と小栗（こぐり）の邸（てい）を立ち去（さ）つて行（い）つた……

それ以來（いらい）、三野村（みのむら）は多年（たねん）の出入（でい）りをピタリと差止（さしど）められた。否（いな）、それ以上（いじやう）に小栗（こぐり）と彼（かれ）とは仇敵（てき）の間柄（あひだがら）となつたのだが、果然（くわんぜん）、幕府（ばくふ）の三井（みつみ）に對（たい）する無法（むはふ）の誅求（しゆうきゆう）が沙汰（さた）やみになつた。それほど小栗（こぐり）に對（たい）して偉大（わいだい）な攻撃（こうげき）力を有（あ）してゐた奉書（ほうしょ）の内容（ないよう）こそ興味（きょうみ）ある問題（もんだい）だが、小栗（こぐり）對（たい）三野村（みのむら）の關係（くわんけい）は畢竟（ひつぎやう）千古（せんこ）の謎（めい）である。兎（と）に角豊島屋（かくとしまや）以來（いらい）、餘程（よほど）抜き挿（さ）しならぬ尻尾（しつぽ）を三野村（みのむら）に掴（つか）まれてゐたことだけは確（たし）かであるが——

一 勤王（きんわう）か佐幕（さまく）か？

三野村（みのむら）はその年の暮（くれ）、齋藤純造（さいとうじゆんぞう）と共に京都（きやうと）の本邸（ほんてい）へ迎（むか）へられた。而（そ）して同族（どうぞく）六家（ろくけ）——その後（ごのち）三井（みつみ）は一門（いもん）十一家（じゅういちけ）となつたが當時（たうじ）は未（ま）だ六本家（ろくほんけ）しかなかつた——列座（れつざ）の上（うへ）、三野村（みのむら）を上座（じやうざ）に据（す）えて、主人（しゆじん）高福（たかふく）から厚（あつ）く今度（このたび）の禮（れい）を述（の）べ、愈（い）々（よく）彼は正式（せいし）に三井（みつみ）の重役（じゆうやく）に列（れい）することになつた。

で、その場で高福は三野村に向つて、

「此の度びは貴方の御骨折りで、當家も一度安泰となりましたが、茲にまた一つ容易ならぬ難題が生じました」と云つて、禁裏から新たに金穀出納所の御用命が出た旨を述べ、奥の一間から菊花の御紋章鮮やかな通達書を捧げて来て、一同の前に置いて見せた。

三井は従来禁廷の御兩替方即ち金融方を仰せつかつてゐたのだが、今度の金穀出納所は時局的にもつと重大な意味がある。即ち何時京都から討幕の火蓋が切つて放されるか分らぬ際で、その軍費を仰せつかつたも同然である。三井としては固より幕府に左擔して京都を蔑しるにすゝ意はないが、さりとして事新たに禁廷に御味方せんか、必ずや幕府の怨みを買つて、今度こそブツ潰されること必定である。兎も角甚だ苦しい立場であつた――

そこで高福が、

「三野村さん、矢張りこれは禁裏に御味方すべきでございませうかな？」と語を繼いで云つた時、列座はげきとして聲を呑んでしまつた。

流石の三野村もやゝ暫く沈吟してゐたが、

「御當家は藤原家の流れを掬まれて居られますな……」と、ポツリとこんなことを云つた。

「フム」と高福は早くも言外の意を汲み取つて、

「されば宗長以來京都にお仕へ申した家柄になつて居るが……」

「然らば史上に於て、當然勤王の大義に就く御家柄と存ぜられる。抑も勤王佐幕の拮抗致して居る際、一方に味方すれば一方を敵とするは理の當然。然し、いづれにも味方せぬとすれば、そも中立者は如何がなことに相成りませう」と頗る婉曲なことを云つて、巧みに方向を暗示した。

三野村は一座をぐるりと見廻した。

「私の考へでは、當家は寧ろ此の際決然と禁裏の御用命を承はり、資力の續く限り御味方申し上げるが上乘かと存ぜられる。その代り萬一京都方敗北の場合は、當家は即ちこれに殉ずるだけの覺悟が必要だが、見事禁裏の御勝利となれば、當家の御身代は倍にも三倍にも、否十數

倍にも致すことが出来ると考へますが、如何なものでございませうな」
これで三井家の向背はすつかり決した。

一 目的には手段を撰ばず

即ち三井は全力を擧げて、勤王に味方した。これによつて討幕軍は先づ鳥羽伏見の戦ひに於て軍餉に遺漏なきを得、その後の形勢も有利に展開して、遂に維新の鴻業も成就した。従つて此の間に於ける三井の負擔と責任の重大はさることだつたが、同時に随分高い米を官軍に喰はせたりして、兵糧方で儲けた金は莫大なものだつた。これらは總て三野村の胸三寸に出たことで、政商の呼吸即ちこゝにありと、彼は北叟笑んだに違ひない。

かうして維新の變動後、三井に於ける三野村の地位がどんなものであつたかは想像するに難くない。彼は名實三井の總理格として思ふ存分に切つて廻し、時にはあまり外部に對して切れ過ぎるので、一門をヒヤ／＼させたくらゐであつた。大藏省の前身として新政府の會計事務を

取扱つてゐた會計局を、三井、小野、高田の三組の御用達に拂下げて、國家の財政を一人の手に收めんとした大芝居の筋書を作つたのも彼である。

彼はまた當時の大藏大輔井上馨(聞多)に深く取入り、山縣有朋あたりの御機嫌を取り結ぶことも忘れなかつた。

本郷の松文堂といふ菓子屋の總領娘で、本郷小町と謳はれた美人を、彼ががんとどきの井上馨に周旋して、向島に圍はせたのは有名な話である。然も此の女は三野村に熱烈に惚れてゐて、最初彼から井上の妾になつてくれと云はれた時には、男の膝にすがつて自分の戀を訴へて泣いたといふほどのお安くない挿話であるのだが、理智そのものゝ三野村は主家三井のためなら、否自己の進路のためには、何物をも犠牲にすることを意としなかつた。兎に角これが有名な安子の方で、井上は毎夜遊里で爛れ切つた情慾を、ふくよかな處女の肉體に満し得て、満足し切つてゐたものだ。かうして三野村は安子に井上の鼻毛を讀ませながら、徐々と搦手から井上を籠絡し、三井と井上の關係をしつかり結びつけてしまつたのである。

一 天馬空を行く生涯

然し、三野村の活動の生涯は案外に短かった——

彼は三井を泰山の安きに置くと共に、著しく自己の氣力の衰へを感じ出した。

維新前後にかけての超人的？活躍の間に、彼の健康はすっかり蝕まれてゐたのだ。三野村は胸に宿痾のあるのさへ氣が附かなかつた。

一日、深川の自邸で多量の咯血をすると共に、彼はそのまま半死の状態で病床についた。

で、愈々死期の近づいたことを知つた或る日、彼は昔ながらの戀女房の文枝を枕頭に呼んで初めて安子のことを告白した。

「あれは、實に可哀相な女だつた……私は今でも悪かつたと思つてゐる。どうか私が死んだらお前はあの女と姉妹になつて、互ひに未永く力になつて暮してくれ」
それから、

「私は明日にでも三井十一家の方々や、井上さんにこゝへ来ていただいて、一同連席の場で、今後若し三井に危急存亡の場合が起つたら、必ず一切のお世話を井上さんに見ていただく、とかういふことにして、お願ひしました、委されたら、双方承知の言葉を聞いた上で目を瞑るのだ」

とこんなことを云つた。此の三野村の最後の執着が、即日彼の枕頭で實現されたことは附け加へるまでもない。

而して明治十年二月の二十一日、一代の策士三野村利左衛門は、口邊に謎の如き微笑を含みつゝあの世へ逝いた。

彼は**智囊の結晶**であり、**野心の権化**だつた。褒めて云へば、その生涯は眞に**天馬空**を行くが如きものだつた。即ちその出世の階梯は必ずしも萬人の手本にはならぬが、凡庸人の企て及ばぬ颯爽味があつたと云へよう。

眞珠王御木本幸吉

(増徳老人第十三話)

一 餛飩屋から八百屋へ

「貴方の聞き上手にほだされて大分種々な人間の出世談をお話して来たが、今日は一つ賑やかに眞珠の御木本あたりを辯じ上げて、一先づこゝらで高座を降させて貰ひませう。別して御木本をとめに据えたわけぢやアないが、ソロ／＼もう澁澤さんあたりの御準備が貴方にもおありだらうから、手前のところは此の邊で、へいお後の用意が——と樂屋を向いて云ふやつさ。アツハツハ、……」

と増田老人愉快さうに笑ひ出して、

「閑話休題、此の間は桑名の諸戸清六のお話しをしたが、御木本も矢張り三重縣の人間で、こ

れは安政五年の正月志摩國鳥羽港に生れた。家は小さな餛飩屋で、小供時分から先考の音吉の手傳ひにゴロ／＼粉を挽いて、それこそ眞白けになつて働いてゐた。十一、二の時分にはもう手車を引いて、うどんやうどん粉を賣つて歩いたもの、今でも鳥羽に行くと、其の頃幸吉からうどんを買つて喰つたなんて、昔を語る爺さん婆さんが居ります……

で、根が非常に發明な人間であつたと見え、十五、六の時、

「何時までこんな割の悪い商賣をやつてたつて、出世のしようがない」と早くも餛飩屋に見切りをつけ、親仁を説いて八百屋に商賣換へした。總じて日用品の商は勉強一つで幾らでものこせる稼業なのを樂しみに、幸吉一生懸命に稼ぎ出したが、此の餛飩屋から八百屋に商賣換へしたのが、他日御木本が輸出眞珠で大成功した微妙な踏み出しの第一歩だつたとはいへ、無論本人だつて氣づきやうもなかつた——

一 船中で角兵衛獅子

御木本は今年たしか七十二歳、先年鳥羽で會つた時には、昔忘れぬ木綿の紋つき、小倉の袴なんぞをはき込んで大變な元氣だつたが、

「何が貴公の御釜の起し始めだつた？」と、漢とした話の出た時、

「サア、別にこれつて何もあれやしないよ。當り前のことを當り前にして來たんだからな。アツハツハ、……」に空呆けて笑つてみせたが、

「それでも考へると自分だけでは面白くないことがあつたよ。忘れもしない明治八年の六月、儂の十八の時だつた。此の鳥羽へ英國の軍艦シルヴァー號といふのが突然やつて來た。こつちは年は若くも商人だ。何でもいゝから外國の金を取つてやるのが商人として御國につくすたつた一つの道だ、なんて小生意氣な考へを起し、度胸をキメて出かけて行つたものさ。持つて行つたのは野菜と玉子、品物だけは腐つたやつが一つあつても異人に嗤はれると思つてね。玉子なんぞは吟味し切つたのを百だけ揃えて小舟に乗り、沖の軍艦の側へ行つて「買はんかア！」と呶鳴つたが、多勢水兵が甲板に出て來てワイ／＼騒いで見てゐるだけで要領を得ない。乗船の手續

きの難かしいことは最初から分つてゐたから、そこでこつちは舟の中に品物を並べて、いきなり鯨鯨立をやつてみせたものさ、儂は小供の時からそんな眞似が器用でね。此の策戦が圖に當つて、士官が上れ上れと手眞似でいふので、のこのこ甲板に上ると、もつとやれと云ふ。こいつにや弱つたが、一世一代の角兵衛獅子をやつて見せてやつたよ。そんなわけでどうにか意が通じて、大分儲けて歸つて來たが、これに味を占めて英艦の碇泊中は毎日行つた。一番可笑しかつたのは、胡瓜の出來過ぎて太くなり切つたのを、大きいから高いなんて、いゝ値で賣りつけちまつたものだ。兎に角これが儂の海外へものを賣り出した最初で、貿易の抑もが角兵衛獅子と玉子だから、今考へても可笑しくてならない。アツハツハ」と、笑ひ話をしたことがあるが、見やうによつては蛇は寸にして人を呑む、後年眞珠王で世界に名を知られた御木本だけに、少年時代大根や人參に取巻かれてゐた時分から、既に眼は海外萬里の彼方に注がれてゐたとも云へませう」

一 ピンと来た箕作博士の言

「それから幾年も経たぬうちに御木本は穀屋になつた。裸一貫から早くも資本のいゝ穀屋になつたんだから、その間の努力は並大抵のものではなかつたでせうが、兎に角穀屋になつて間もなく眼をつけたのは支那貿易だ。國のうちだけの商賣ではいくら儲けたにしろ、國內の金をやり取りするに過ぎない、それには先づ手近の支那から——と、以前英艦相手に玉子を賣つて儲けた慧眼は、齡と共に理詰になつて来た。さうして機會を覘つてゐるうち支那渡來の眞珠が眼についたが、然かもこいつが年々産額の減する一方で、やがては獲れなくなるだらうといふ話だ——

「眞珠！ こんな綺麗なもの年々減る一方で、値段が高くなるといふのは面白い。何か工夫のありさうな話だぞ」と考へてゐた矢先、故人になつた箕作博士が「眞珠は養殖出来る。養ひ方さへよければ立派な眞珠が出来る」と話をされてゐたといふことを耳にした。生れが海國

の志摩、日頃眞珠に目をつけてゐた矢先だから、博士の一言はピリリと頭に來た。

「よし！ 俺がやらう」と一切今までの商賣を叩きやめ、何も彼も賣り拂つて、一家を擧げて志摩國の高徳島に移住し、辨天島で眞珠養殖に手を染めた。時に明治二十三年の九月、御木本は三十二歳の働き盛りだつたが、高徳島の辨天島のと、これは名前からしてつけがよかつた。ハツハ、……」

一 四面嘲笑の聲

「然し、島に立籠つた御木本にすれば文字通り背水の陣で、眞珠養殖の成る成らぬは一家の浮き沈みであり、乗るか反るか生涯の運の岐れ目だつた。眞珠だ、眞珠だ！ とかうして御木本が眞珠に夢中になつてゐると、眞珠の何たるかを知らない世間では、
「あの利口者もどうかしたぜ。寶石以上に値打のある眞珠が人間の力で養殖なんぞされて耐るものか。何處かの博士の云ふことを眞に受けて、あれまで夢中になるとは御木本も存外大馬鹿

の標本だ」とかう云つて嗤つたが、堅く信ずるところのある御木本は馬耳東風で、

「ヘン、今に見ろ」と腹の底であべこべに世間のもの知らずを嘲つてゐた。
 で、そんなこんなしてゐる中に着手の二十三年は早くも暮れ、今年こそと楽しみにした二十四年もその甲斐空しく、次の二十五年にかゝつても唯一粒の眞珠も出来ずに既に三年越となつた。元來が地方のことだから、世間の噂は益々酷くなつて、

「あれは大山師だ」
 大山師

「幸吉づれに金を出してゐた奴の氣が知れぬ。それにしても本人は自業自得だが、家の者が惨めなものさ……」などとひどいことになつて來た。併し、世間の口なんてものはそのまゝ聞き流してゐれば濟みもするが、三年越の養殖三昧、全く以て融通もとまり、衣食にも窮する有様に墮ちちまつた。流石の御木本も一時大分參つたが、此の時だね、あの男の鐵石心の出たのは
 「なあに、どうなるも運命だ。行くところまで行きつくせ。誰が今更後戻りするものか！」と

頑として周囲の反對を押し切り、止めるなどとはおくびにも出さなかつた。さうして又一年、血の出るやうな我慢の又一年を送つたものでした……」

一 眞珠は汗と涙の結晶

「明くれば明治二十六年、島に籠つて四年目の春を三度の食事も減する思ひで迎へたが、まだ眞珠は出来なし。

そこで御木本も、

「もう俺の運も末だ」とさう腹をキメて、今日しも養殖の現場へ出かけて行つたのは、もう陽ざしの暑い六月の十一日、克明に貝の一つ一つを見て行くうちに、どうでせうピカリと光つたものがある！

「眞珠?!」と云つたつ切り、流石の御木本も暫く聲が出なかつた。「その時は寧ろ儂もギョツとしたくらゐだつた」と本人の他人に語つてゐるのはさもあらうこと。

然し、手に取り上げてみると紛れのない養殖真珠、而かも美事な出来だから、
「おう、出来たぞッ！」と家の方へ向いて咽喉一杯に嘔鳴ると一緒に、ポロ／＼涙が出た。家
族の者も馳けつけて来て共に泣いたさうだが、此の時御木本は三十六歳、今からザツと三十五
年前の昔だ。兎に角からした次第で、一家餓えに迫つた土壇場へ来て、とうとう成功した。驚
いたのはそれまで山師扱ひ、狂人扱ひにしてゐた世間だ。人情紙の如し、昨日まで御木本を
罵詈譏してゐた聲が、忽ちにして賞讃の聲に變つてしまつた。我れ世に勝てりといふわけさ
ね」

と増田老人にやりとして、

「で、御木本の成功を見るにつけ、土地の者でも少し山氣のある連中はたゞ指を啣へて引込
んでゐない。いゝ加減な養殖場を拵へて、養殖真珠で候なぞと名乗りを上げる者が續出した
ので、御木本は明治二十九年に政府から専賣特許を受け、名實共に日本唯一の眞珠養殖場に
なつた。翌三十年には先帝が伊勢大廟に行幸あらせられた際、殖産上の功勞者として特に拜

謁の光榮に浴し、緑綬褒章を賜つた。これが御木本の出世の緒口です……」

一 世界に名を擴めた大訴訟

「それから大正時代に入つて同十年、全く天然眞珠と變りのない眞珠を探ることに成功した。
然し一方あまり見事な出来なので、英國で贋物だと云はれたことから、先方——佛蘭西の或る
會社を對手どつて世界的の訴訟を起し、エツキス光線 紫外線などとあらゆる化學の試験を受
けた結果、全く天然眞珠と變りのないことが證明され、訴訟に勝つと共に名を世界的に賣り擴
めちまつた。初手は少しぐらゐクサク／＼もしたでせうが、考へてみれば、成程、これほどいゝ
宣傳はなかつたわけです。」

御木本の事業は今日輸出額だけでも年に百萬圓を超え、眞珠と云へば日本の御木本と云はれる
くらゐ、全國に五ヶ所の養殖場があつて、鳥羽の養殖場だけでも二百人からの人間が働いて
ゐる。本店はあの銀座の店で、ものによつてはダイヤなんぞより高い品物がふんだんに並べ

てありませう。一體が趣味の無い男で、趣味と云へば結局眞珠の研究、今でも昔の幸吉で若い者の先きに立つて働くといつたわけです。

何んにしても御木本の成功は、時世に魁ける眼のつけどころ、嚙りついたら石をも砕く辛棒強さ、どんな艱難でも笑つて押し通した鐵石心の賜物でしたらう。此の意味合で、どんな成功者だつて、みんなチツトは變り者だ。目的に一心になれば、人間に偏つたところの出来て来るのは當り前の話、だから皆一度は甚だしい貧乏をしたり、狂人扱ひにされたり、普通の人間なら大概こゝいらでゲンナリしたり、小賢しく他の方へ立廻つたりするが、そこを能く潜り抜けて、しつかり目的を擱んだのが成功者といふわけ。

竟り、これと見込みをつけたら、何もかも抛り出して末まで遣り遂げることが、出世の要諦ではありますまいか。いや、こんな月並な御説教で、これまでの長話を終るつもりでもなかつたんですがね、年を喰ふとツイどうも。ハツハツハ……』

財界の大御所澁澤榮一

一 算盤片手に論語を説く

財界の大御所澁澤老子爵——今やかゝる封建的尊稱の似つかはしからざる國民的存在だが——は實業界における最も偉大な成功者であると共に、一個の完成人であり達人である。

子爵は算盤を片手に孔孟の教へを説く。由來ソロバンと道徳は一致せざるやうに吾等には考へられて來たが、翁は倦むところなくこれを説いて、商業道德の語義、翁によつて始めて突々たる精彩を生じた。

兎に角澁澤子くらの功成り名遂げた感のある人物は現代その比儔を見ない。即ち澁澤傳、青澁子爵傳の世に汗牛充棟も雷ならざる所以である。然し幕末維新における翁等の出世的活躍に至つては、時に迷雲漠々、容易に遮個の眞相に通じ難き憾みなしとせぬから、敢て茲に老子爵

の往時談を乞ひ希ひ、讀者諸君の批判に俟つを賢明とした。

何が彼の出世の階梯となつたか？

一代官に對する疑惑

八集

「私にはこれぞといつて出世の緒口がないと思ふが、たゞ小供の時分から國家社會に役立たうといふ觀念はあつた。私は埼玉縣大里郡の安本村と云ふ極く質朴な村の農家に生れた。親が多少文事を好んだところから漢籍を學ばされた。その時分の百姓的教育は無論西洋の事などはない。支那の事でも文學的教育はなくて、先づ四書五經、それも極く大體だけ、而も『君子は本を務む、本立つて道生ず、孝弟はそれ仁の本か』と論語にあるやうに、人を極く賢明に、さうして國を大切に思ふといふ觀念、君に仕へ親に仕へる必要を教へることを要諦として居つた。私の親などは一向學者ではなかつたけれど、それくらゐのことは理解するので、私共はそれで

以て育てられた。これが家庭教育であつた。

で、幾らか物を知るやうになつて來ると、政治を執るものと人民との差別が餘りに甚しいこと、同じ人間であるのに、どういふ譯で政治に携る者が大變に威張つて、その支配を受ける者は奴隸的待遇を受けるのであるかといふことに、少年ながら疑ひを起して來た。書物には、賢者が先きに立つと云ふやうに書いてあるのに、少しも物知らぬでも士だと大變威張る、さうして一方は唯命惟れ従ふといふのはどうも良い政治ではない——と斯ういふ觀念が十五六から起つて來た。

それに就いては、世間にも知れてゐるやうだが當時こんな話があつた……。

私の十七の時に、村方からつい一里半ばかり離れた所に岡部といふ土地があつて、其處に領主の陣屋があつた。そこのお代官から私の家が用金を命ぜられて、それを受けるとか受けぬとかいふ挨拶のために親に代つて代官所に行つたことがある——
ところで、其の時の代官の私に對する態度は言語同斷であつたのみならず、心事の卑劣さに

至つては唾棄するの外なかつた。また濫言が縁言を言ふと云はれるかも知れないが、今でもその時のことを思ひ出すと腹が立つ。私は寧ろ其代官をブン殴つてやらうかと迄思つたけれども一家に迷惑の掛るのを思はざるを得なくて、ちつと蟲を殺して忍んでしまつたのである。その時から、領主の専制に任して置くといふ制度は實に不都合だ、昔の王朝の政治は決してさうでない。それを幕府が斯ういふ世官世祿にしてしまつて、どんな馬鹿でも政治を執る方は威張れるといふ風にしたのだ、これはどうしても改革する必要がある——といふ觀念が深く心に根を下してしまつた。私の發憤の動機は強ひて云へばこんなことかも知れない』

一 倒幕派變じて幕臣となる

「話が少し前後するが、亞米利加のペリーが浦賀に來たのは嘉永六年で私の十四の時だつたが聊さかでも時勢に心ある士はみな國防や外交について議論をしたものだ。私共も田舎にゐて、扱て是から先き國がどうなるだらうといふやうなことを盛んに議論してゐたものである。それ

が丁度私の十七の頃、即ち安政二年に至つて幕府の外交問題は 酣に達し、翌年にはケンセンと安藤對馬守との間に假條約が出来、更に同五年掃部頭が京都の許可なくして假條約を結んでしまつたといふので、京洛の志士は頻りに幕府の失政を攻撃した。然るに間もなく有名な安政の大獄が行はれ、勤王志士も一時鳴りを鎮めたかに見えたが、事實は寧ろその反對で、一時ブス／＼底に燻つた焰は反つて火勢を強くして四方から燃え上つて來た。即ち尊王攘夷の輿論で、幕府はさまざま憎くはないけれど、此の政治を改革せねばいかぬ、王朝の昔に復せといふことになつて、勢ひこれが倒幕運動の形を取つた。

かういふ形勢だから、私なども逆も田舎に居られず、十七から二十二三歳までの間に三度ばかり江戸に出て漢學塾に入り、半年若くは三ヶ月くらゐは書生仲間と交りをしたから、尙更この時代思想が強くなつた。

かうして尊王攘夷、討幕の思想に激せられて、吾々同志は一種の謀叛を企つるに至つた。それは睦仁親王の綸旨を奉じて、攘夷討幕をやらうといふやうな企てをしたので、もう少しで其

の擧に出づるところだつたが、我々の總代で京都に行つてゐた從兄の尾高長七郎といふのが歸つて来て、とても未だそんな事は出来ぬ。暴擧は慎しめ、と旺んに反對したので、遂に沙汰止みになつたが、後から考へるとこれは止めてよかつた。

で、文久四年私が二十四の年に、私は百姓を廢めてもう一人の同志と共に京都に出た。すると、吾々の前の企てが多少その筋にもう知れてゐたと見えて、八州取締(捕吏)の手が大分身邊に厳しくなつて来た。當時私は、一ツ橋家の主立つた家臣で平岡圓四郎といふ人を知つてゐたが、此の人のところへ幕府の方から取調べが行つたので平岡が大層心配してくれて、「愚圖々々してゐると君方は安政(斷獄)の二の舞になる。早く今のうち身を轉じろ」と、いろ／＼に案じてくれたので、到頭一ツ橋の家來になることに決めた。少し前までは自分達の力で幕府を倒して天下を取らうといふ位の大望を懷いてゐたのが、一ツ橋の家來になつたのだから、まことに驚くべき變化である。時に元治元年の二月の下旬で、此の時初めて百姓から身を轉じて武士となつたわけである。

一歩兵隊編成

その時分、私は海外の事は何も知らぬ上に、異國のものは一切身に着けまいと云ふ頑固な攘夷家であつたが、併し段々考へてみた結果、どうも餘り感心したことでないといふ氣持に變つて来た。此の思想の變化を今も考へて見るが、兎に角當時そこへ考へをつけたのは却々利口だつたと思つてゐる。私は純粹な攘夷論者でなくなつた。

そこで先づ一ツ橋の家來になつてみると、こゝには兵備といふものがない。幕府の兵隊はあつても一ツ橋に對しての常備軍などは全くない。併し時勢で一ツ橋家は京都の御守衛總督といふ役目を仰せつかつた。御守衛總督と云ひながら一人の兵も無い。そこで私は新參者だつたが主立つた人達に向つていろ／＼注意を言つてみた。ところが「さういつても兵備を持つ工夫がない」といふので、私は「金の都合さへ附けば、人間はたちどころに拵へて見せる。二大隊千人くらゐなら造作なく造つてみせよう」と威張つたものだつた。どうするかと云ふと、私は歩

兵の志願者を募集する考へだつたので、とても鎧兜の戦では費用も足らなければ訓練も出来ない。歩兵ならば、當時幕府で佛蘭西式を練習してゐたから、幕府から人を採れば指揮は出来る、軍隊だけはどうしても西洋式を採用しなければなるまい——と恚ういふ意見だつた。これは其の時分幕府の立役者として歩兵の編成に當つてゐた小栗上野の輩に倣つた次第で、到頭私は歩兵組立御用といふ役目を仰せつかつて、首尾よく二大隊を作つた。この兵隊が後に却々役に立ち、一ツ橋公が朝廷の上意を受けて大阪から京都に出て、例の鳥羽伏見の戦争が起きた時此の二大隊が加はつてゐて大分の働きをした。

その他、一ツ橋家の財政に就いても種々意見を立てたが、こんなことで私の力量も幾分内外に認められることになつた。

一 佛蘭西に留學

「一ツ橋公(慶喜)が將軍になられることになつた時、私は大いに反對した。といふのは、一ツ

橋公が將軍になれば、必ず薩長の力が一致する。これまでは幕府の力が弱いために反つて討幕の勢ひが強くならずにゐるが、一ツ橋公が將軍になれば幕府の勢力が立ち直る。立ち直れば、攻撃観念を有つた者は必ず力を協せて向つて來るといふことになる。だから丁度倒れかゝつてゐる家の主人にわざわざなるやうなもので、愚かな話と考へたからだが、到頭十五代の將軍に出られてしまつた。それで私などはひどく落膽した。

「もう徳川もこれで倒れるに相違ない、まことに無念だが」などと思つてゐるうちに、慶喜公から佛蘭西行を命ぜられた。丁度慶應三年の正月のことで、即ち一千八百六十七年の巴里の博覽會へ慶喜公の弟御の民部様が行かれるについて、私はそのお供を仰付かつたのである。それで私は御維新の當時は日本に居らなかつた。最初五年くらゐ留學させるといふことであつたから、その間に日本に大變化があるかも知れないが、縦しやどうなつても自分は相當な學問を修めて歸つて來られる、斯ういふ楽しみで行つたのである。

ところがその年に直ぐ慶喜公は政權を返上し、その後鳥羽伏見の戦から逆賊とか朝敵とかい

ふことになつて、大騒動が起きてゐるといふ便りを受けたので、私は民政部様に随つて勾留と歸國した次第だつたが、向ふに居たのは一年と十一ヶ月ばかり、方々巡つてから佛蘭西に九ヶ月あまり滞つてゐたが、兎に角此の留學はあまり得るところがなかつた」

一 大隈侯と大激論

「併し、その時から私は考へた。最初政治家になつて、天下を引繰り返さうといふやうなことで家を出たのだが、さて實際にやつて来ると却々思ふやうに行かない。殊に今や日本の政治は大變化して、王政復古といふことになつた。そこでほとく感じた。「自分の分に無いことを考へたのは間違つてゐた。政治家は止めにしてしよう。併し家へ歸つて再び百姓になるのもあまり智慧がない。今日の有様を観るとどうも、政治と經濟の間がまるで歐羅巴などと違つてゐる。これがどう西洋式に變つて来るか豫測出来ないが、今のところでは民業と官業、學問と實際の働きのまるで別だ。これをどうにかして密着させなければ國家が立たぬ。然るに未だ誰もそこ

に氣が付かない。憚りながら自分が一つそれを見事にやつてのけて、今までの幕府式の悪弊を排除してみよう。これだけを死ぬるまでの事業としてやつてみたい」とかう考へた。で、私は隠居された慶喜公に随つて静岡へ行つて、其處で一つの事業を企てゝゐると、新政府から大藏省の役人になれといふ勧誘を受けた。これが明治二年の冬で、私は最初断らうと思つてゐたのだが、断ると異心があるやうに向ふに思はれるからと、頻りにハタの者が心配してくれたのでやむなく、一旦命を受けて、静岡から東京へ出た。そこで其の時大隈さんが大藏省に居られたので、私は始めてお目にかゝることになつたのだが、お互ひに書生風だから話が種々な議論になり、私は先刻の持論と希望を切に申してみた。さうすると大隈さんが、

「少し君の考は違ふ。或點は尤もだが、それを今直ぐやると云ふても、それは出来ん。先づ少し大藏省の仕事を進めて行かうぢやないか。三年になるか五年になるか分らぬが大藏省で働いて、好い時期に官を辭してやつてみるが一番宜しからう。財政經濟をやらうといふならば、

どうしても財政の事務を先にしなければならぬ。殊に金融が甚だ大事だが、金融はどうして出来るか、未だ合本の法がないではないか。平たく云へば良い種を蒔かうといふならば地面を肥やさなければならぬ。今はその地面の荒れてゐる時だから、先づ肥やすがいゝではないか」と大體かうした却々氣の利いた御説法を受けて、私も多少心持が變り、
「それでは驥尾に附して何なりと働ませう」と答へて遂に大藏省に出仕することになった。以上のやうな譯で、官途に就くことは決して私の素志ではなかつたが、兎に角これが中央に出る踏み出しとなつたことだけは、否めぬ事實のやうである」

一 廢藩置縣の大功勞者

「翌明治三年に伊藤さんがアメリカに行つて色々政治經濟に關することを調べて來た。今の銀行制度などは其の時に出來たものである。それから、會社組織の法律はもつと後に出來たのだが、會社の組立といふものは斯んなものだといふことだけは、矢張り伊藤さんがアメリカへ行

つて調べて來たのだ。すると間もなく大隈さんに代つて井上(馨侯爵)さんが大藏省を支配することになり、今度は私は井上さんの番頭で使はれた。明治四年、五年、それこそ前の一年はこつぴどく使はれた。

井上さんはまことに性急な、有名な肝癪持の人だが、却々思慮があり、組織的には知らぬけれど所謂思慮湧くが如しといふ人であつたから、色々な考は出すけれど此の人の力だけではどうにも纏まらぬ。そこで私が幾分輔佐役といふわけだつたが、私とて物を知らぬから相當な學者をお頼みして、兎に角新政府の財政をやつた。例へば廢藩置縣は明治四年の七月十四日に發令されたのだが、これなどは何しろ二百六十七藩のいんしよ仕舞ひをさせようといふのだから、謂はば天下の政治を引繰返すやうな大仕事だつた。而してそれがみな、大藏省の仕事だから、私なども實際精根の續く限り働いたものだ。

で、その仕事もどうか目鼻がつき、茲に始めて太政官紙幣を兌換法にして一の金融の規則を立てる、貨幣は金貨制度にする、さうして亞米利加ナショナル・バンクシステムに従つて銀

行組織をやり、公債を起して大いに歐米式の經濟法をやらう——といふ段取りが出来上つた」

一 潔く官途を辭す

「ところで翌六年の春、各省豫算の問題から井上さんが江藤新平、大木喬任の人々と説が合はず、太政官で大喧嘩をした末官を罷めることになつた。井上さんは大藏大輔、私は少輔で、竟り今日の次官をやつてゐたのだから、順で云へば私が後を引受けなければならぬのであつたが之を引受けると何時までも袋を背負つて動けなくなると思つたので、井上さんが辭すると共に私も早速辭表を出した。

その時當の井上さんを始め大隈さんなども頻りに止めてくれたが、私は大隈さんに向ひ、「不肖の如きものが井上さんの罷めた後を引受けたら、今後もう官途から足を抜く時がありますまい。それでは私の趣旨が全く滅却されてしまふ。貴方は私が明治二年に辭表を出さうとした時マア——と止められて、銀行制度が出来たらと仰しやつた。その銀行制度も既に出来て、

サアこれからやらうといふ私の氣なのだから、貴方にはもう止める權利はない。強つて止められては貴方の御言葉が嘘になる」と斯んなことを云つたので、「已むを得まい。宜しくやつて見給へ」といふことで、あまり面倒なこともなくスラリと野に下ることが出来た。

私は大藏省で三等出仕を振り出しに先づ租税正、大藏少丞、樞密權太夫、大藏大丞、紙幣頭それから最後の大藏少輔と可なり目まぐるしく官職が上つて行つたわけだが、何はあれ明治二年から六年までの間、謂はば自分の目的の地盤拵へのために過してゐたやうなもので、官を辭するやいなや、私は自分が在官中に世話を焼いておいた第一銀行の頭取——その頃は未だ總監と呼んだ——となつて、財界の一步を踏み出した。

一 人は分を知れ

「實を云ふと、私は其の後も三度ばかり役人になれといふ勧めを受けた。而も明治三十幾年か

の時には、井上さんが内閣を組織しようといふことで、私に大藏大臣になれとやかましく勧められたのだが、私は「第一、銀行の事業も大切ですよ」と切に御辭退申して、辛くも役人たることを免がれ、益々民間事業の發達に微力を傾倒して、どうやら初一念を貫いたやうな次第なのである。

で、これは餘談だが、明治三十何年頃だったか「實業の世界」の社長の野依(秀一)君が、私にあまり種々な事業に關係してゐるので、

「ナニ、濫澤は偉さうなことを云ふけれど、性根は慾張りで何にでも手を出す彼是屋である」といふので大分手酷く私を攻撃して來たことがあつた。こつちがさうではないと云つても、依然として私の攻撃を止めなかつたが、四十二年に一切の事業から私が手を引いたので、

「成程、貴方といふものが始めて理解出來た。貴方は云つた通りのことをする人だ」と云つて積年の疑惑が解けたやうに見えた。

要するに、私は自分が金持にならうといふために努力して來たのでないことだけは自信を有

つてゐる。即ち今でも金持にならうと思はぬし、又これ切りでなれもせぬ人間だらうが、さればといつて親譲りの財産で今日の地位を得たわけでもなし、相場で儲けた覚えもなし、兎も角もこれだけの生活が出来るやうになつたのだから、全く金持になれぬ人間とは云はぬつもりだ。私は今年九十一になるが、幸ひ大した病氣もせず生きてゐる。若し二十四の時暴舉を決定してゐたならば、その時すでに骨になつてゐたに相違ない。又維新の際佛蘭西に行かずに日本にゐたら、或は慶喜公の關係でどんなことになつてゐたかも知らぬ。それにつけても人といふものは、自己の分を知る、自己の分をつくす、自己の能力に應じて精一杯働いて行くといふことが第一に大切であると思ふ。自然に能力の進むところに、成功は育まれる筈だ」

一 財界の組織的發達を謀る

第一銀行の創業を振り出しに、所謂財界における一代の功績は語るも野暮だが、野暮を承知でザツと過去の關係事業だけでも擧げてみると、銀行、製紙、紡績、瓦斯、電力、製鋼、鐵道

築港、海運、保険、製糖、製麻、肥料、牧畜、印刷、煉瓦、セメント、ビール、ホテル其他エトセトラと、全く以て一息に並べ立てるにも骨の折れるくらゐ、當今屈指の大會社にして、その創業當時彼れの手を煩はさなかつたものは殆んど皆無と、世間で云はれてゐるのも宜なる哉である。

そこで、よくもこれまで仕事をして來られたもの、店を擧げたものかなと、野依君ならずと雖も、此の事業の問屋的の面目に一驚を喫せざるを得ざる次第だが、然かもこは寧ろ澁澤榮一の本懐で、終始一貫財界の大世話人を以て任じ、その自己を利すると何たるかを問はず、只管事業總體の向上と發展に力瘤を入れたる結果たるや、更めて云ふまでもなからう。

就中子爵の功勞は、財界の組織的發展に盡瘁したところにあるといつてよい。即ち彼が自ら第一期の會頭となつた商法會議所(現在の商工會議所)を初め兩取引所、手形交換所、銀行集會所、興信所等商業機關の設立運用は、悉く彼の提唱、斡旋盡力によらざるものはないと云つて過言でないのである。

で、論議はさておき、澁澤榮一の公明なる性格と事業的態度を語る上に、最も好個の話柄がある。

一 瓦斯局に絡る逸話

時は明治十四年、澁澤は東京府から頼まれて、無給の瓦斯局長といふものをやつてゐた。東京府瓦斯局即ち今の瓦斯會社の前身で、これは由利公正の府知事時代に東京市の共有金で府の經營事業となし、吉原へ瓦斯燈をつけたのがそも／＼の始まりである。然るに幾許もなく電燈といふ勁敵が現はれ、瓦斯は次第に電氣に壓倒されて來たために、いつそれを民間に拂下げ、損失を未然に防がうといふ尤もらしい議が起きた。

と、これをいち早く耳にしたのが當年の淺野總一郎である。この瓦斯局には二十四萬圓の資金がかゝつてゐたが、淺野は即金五萬圓を納め、残る十萬圓は無利子の十ヶ年々賦といふことで許可してくれ——と甚だ蟲の好い考へで府會議員の間を運

動した。そこで府會の常置委員といふものが寄々協議の結果、五ヶ年々賦くらゐなところで淺野に下げてやらうといふことに内議が一決した。

淺野は澁澤邸を訪れた。澁澤と彼の關係は、前に淺野のくだりに書いておいた通り、大概なことなら此の大先輩に聞いて貰へる仲なのである。

「實は遠慮して未だ御相談に伺はなかつたが、かういふ譯で瓦斯事業を拂下げて貰つて、大いに民業でやらうと思ふので、それに就いては是非共貴方の御盡力が煩はしたい。貴方の名が加はれば、何とか民業でもやつて行けると考へてゐるのですがね……」と、可なり高飛車なことを云つた。淺野の計劃は瓦斯の使用を燃料用に振り向けて儲けるつもりだつた。

泣き込まれれば厭と云へない男の澁澤榮一の顔が、みる／＼中に歪んでしまつた。

「見て見ぬ振りをしてをつたが、一體君の運動はどういふ量見だ！ 儂が瓦斯局長を頼まれて明治九年に十萬圓の金を府から出させた時にも、一度廢止の議の起つたのを極力反對して今日まで苦しんで來たのに、今更電燈が恐ろしいといふだけで、そんな狼狽した馬鹿げた拂下げ

が出來ると思つとるのか！ 成程、君のためには都合がよからうが、元々儂は一身の利益のために起した事業でなし、今、府が手を離してしまへば永久に損失の償ひが出來ん。然かも君の口吻によれば、君に拂下げておいて儂も一緒に關係するなどといふ、そんな不見識な、そんな不公正な眞似が、此の澁澤に眞面目に出來ると思つて君は來たのか、以ての外だ！」と、大變な見幕になつた。

淺野は少々アテの外れた氣味だつたが、

「いや、貴方の氣質としてまことに御尤もだが、併し、世間は貴方が清廉の士であることをよく知つてゐる筈です。みす／＼儲かるのを見捨てる必要もなからうと考へたまでのこと……」

「何に儲かるツ！ 君は一體それを誰に云つてる！」と益々氣色ばんで、

「俺は瓦斯局長を儲けづくりにやつてるんぢやないぞツ！ 何度も云ふやうだが、今まで東京府にかけてゐた損失を埋めるために働いてゐるんだ。オイ、二十四萬圓耳を揃へて即納するなら

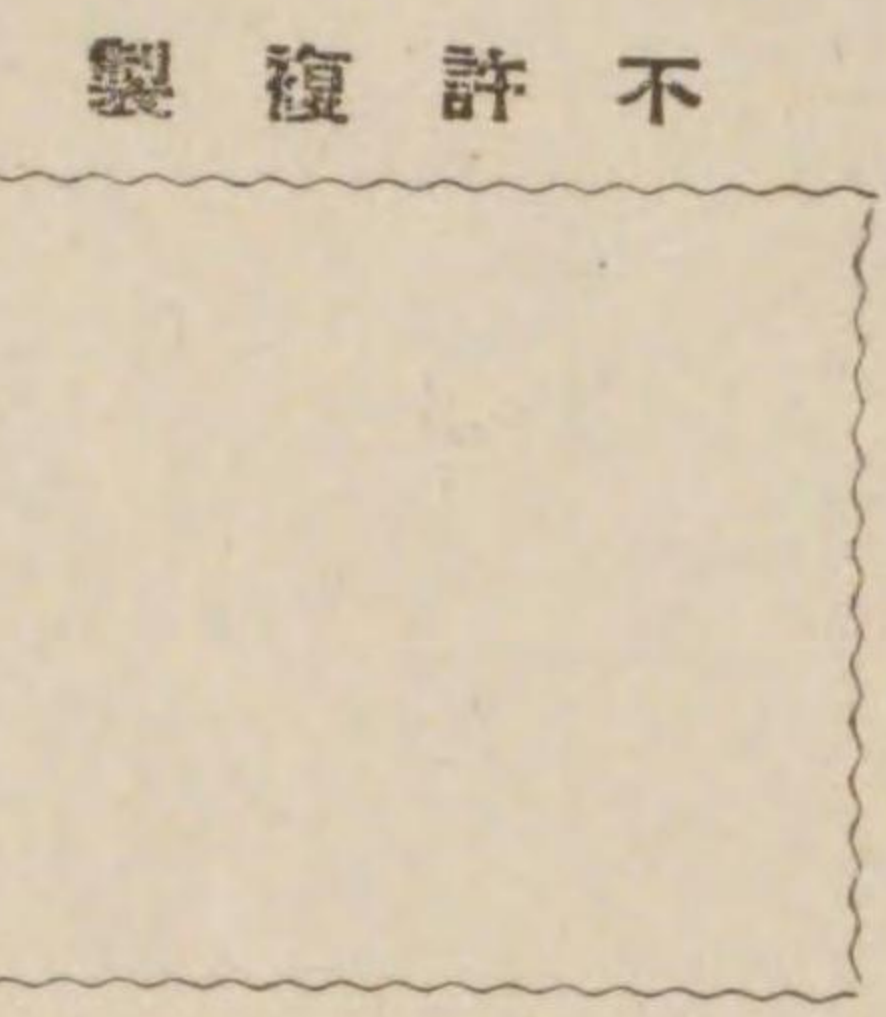
大 動した。そこで府會の常置委員といふものが奇々協議の結果、五ヶ年々試くらゐなところで淺

大成者出世の緒

只今即刻でも局長の判は捺してやる。それ以外は眞甲から反對だ」
「そんな、二十四萬兩即納なんて……！」と淺野は聲のない笑ひを笑つてみせた。
「媿い！ 歸つてくれッ」と眞青になつて椅子からもう立ち上つてしまったので、流石の淺野
總一郎も呆々の體で退散せざるを得なかつた。
翌日、澁澤榮一は由利府知事に會つて、極力拂下げの時期尙早と不可を説き、遂に淺野の
運動も畫餅に歸してしまつた――

ともあれ我國財界の大成功者中に、此の士魂商才の典型人を見るは一の欣快事である。

昭和五年九月七日印刷
昭和五年九月十日發行



「大成者出世の緒口」
定價參圓八拾錢

著者	野澤嘉哉	東京市本郷區駒込林町一九八番地
發行所	前原秀行	東京市神田區西小川町二丁目五番地
印刷者	木村誠一	東京市芝區栗平町七番地
發行所	晨高社	東京市神田區西小川町二丁目五番地 振替東京一五八番 電話九段三四八一番

578
322

